

# 『資本論』第一章「商品」のディアレクティーク

丹 野 正

## はじめに

マルクスの『資本論』は、“商品”の分析から始まる。本書全体のテーマは、そのタイトルとサブタイトルに掲げられているように、“資本”および“経済学批判”である。彼が本書を商品の分析から始めた理由は、第一章の冒頭に述べられている。

資本主義的生産様式が支配的に行なわれている社会の富は、一つの「巨大な商品の集まり」として現われ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現われる。それゆえ、われわれの研究は商品の分析から始まる。(49ページ\*)

彼が、本書で「われわれが考察しようとする社会形態」(50ページ)と言っているのは、上記のような社会である。古今東西の人間社会はこのような社会ばかりではなく、別の社会も存在したし、存在する。「資本主義的生産様式が支配的に行なわれている社会」、「社会の富が一つの巨大な商品の集まりとして現われ、一つ一つの商品がその(社会の)富の基本形態として現われる」そのような社会は、彼が本書執筆当時の現代欧米社会である。

資本主義的生産様式がいまだ支配的に行なわれていない社会においても、その社会の富の一部は、“商品”という姿をとっていた。つまり、交換・売買の対象となっていた。これは、逆に言えば、その社会の富の他の部分は商品という姿をとらなかった、ということである。さらに時代をさかのぼると、または現代のいわゆる未開社会では、その社会の人も当然ながら富を生産し、それらはその社会の人もとの間を巡り動き、消費されるのだが、しかし、それらつまり彼らの社会の富は、“商品”という姿をとらなかった、ということになる。たとえば、私が調査したアフリカ熱帯森林の狩猟採集民アカ・ピグミーの社会がそうである(丹野, 1991)。マルクスは、こうしたさまざまな社会形態を念頭におきながら、そしてそれらの社会と比較しながら、当時の現代欧米資本主義社会を分析するのである。

---

\* 『資本論』からの引用は、「マルクス・エンゲルス全集23a」(大月書店)の岡崎次郎氏の訳による。カッコ内の引用ページは、訳書に示されている原ページで示す。なお、この岡崎訳は大月書店の国民文庫版『資本論』として文庫本にもなっている。原ページは、どの日本語訳本にも示されており、参照するのに便利である。

次に、彼は商品の分析から始めるのだが、これも当然のことながら、商品の分析を行なったのは彼が最初ではない。彼以前から多数の学者たちが商品の分析を行っていたし、経済学という学問分野が確立していた。彼はもちろん彼らの分析・考察を参照しながら、彼自身の商品の分析を押し進めた。ただし、彼の分析・考察の方法と、その第一章における叙述のしかたが独特なのである。最初に彼は、当時までの経済学者たち、あるいは経済学は、商品とはいかなるものであると規定しているかを問う。答えは、商品とは使用価値であるとともに交換価値でもある、である。それでは、あなたたちは何をもって使用価値と呼び、交換価値とはいかなるものを指すのかと問い、彼らの回答をさらに問いただし、彼らの論理をとことん追いつめ、彼らの論理を突きつめていくとどのような結論に導かれるのかを検証する。そしてそこに、彼ら自身がまったく気づかなかった矛盾、謎、不可解さが現われてくる。彼は経済学者たちとの対話を通じて、それらを一つ一つ折出してみせる。彼の方法は、まさにディアレクティブーク（対話法、問答法、弁証法）なのである。

彼がこうしたディアレクティブークを展開した結果、経済学が首尾一貫した論理体系をなしていることがわかれば、彼が本書のサブタイトルを「経済学批判」とするはずがない。彼はまさに経済学を批判したのである。また、彼はそれまでの経済学の誤りや不十分さを指摘し、正しいまたは新たな経済学を構築しようとしたのでもない。本書を読んで私はそう思う。経済学は、「われわれが考察しようとする」この社会を基盤として築かれた学問である。だから、この社会がこの社会に固有の矛盾を内包していれば、それはこの社会の兒である経済学という学問にも内包されている。それゆえ、経済学を批判し、その矛盾を明らかにすることは、この社会が内包している矛盾を明らかにすることでもある、というわけである。

私は本稿でも前稿（丹野，1996など）でも、『資本論』からの引用文は岡崎次郎氏の訳を使用している。ほかに2・3の日本語訳書を第一章の部分だけ読んでみたが、日本語訳としてはこれがもっとも優れていると思うからである。しかし、読んでいて何か変だぞと引っかかるころ、きちんと文脈をたどれないところは、岡崎訳だけでなくどの訳本でも同様であった。それでエンゲルスの英語訳から、もちろん岡崎訳その他を参照しながら、自分で第一章のはじめの部分の訳を試みた。自分で訳すのだから当然だが、私にとって文脈は多少なめらかになる。ただし英語からの翻訳文章は、接続詞その他の関係で、ドイツ語原文からの既存の訳とは前後の文章が逆順になったりし、かなり異なってしまう。そこで、ドイツ語文法の教科書とでかい独和辞典とにドイツ語原文のそれぞれ一語一句を当たって調べ、第一章部分の訳を行ってみた。

訳を進めていくうちに、途中ではっと気づいたのは、原文はマルクス自身が書き進めている・叙述している文体として書かれてはいるものの、内容とその文脈からは明らかに対話と問答として書かれている文章なのだ、ということだった。つまりマルクスは、彼自身であったり、経済学者になったり、商品社会の人になったり、問いつめる人だったり、分析したり、その結果を整理して提示してみせたり、さまざまな人と立場に自由自在に変化し、それぞれの人とその思考を述べるのである。まさにプラトンの対話篇をすべて地の文に書き直したような文章なのだ、ということに気づ

いたのである。ただし、ドイツ語原文が地の文章そのものの文体で書かれているのだから、それをそのまま忠実に訳せば、まさに岡崎訳その他の文章にならざるをえないのだが。

岡崎次郎氏も他の訳者たちも、こうしたことには気づかなかったと思われる。また、私も含めて彼らの訳をもとに本書を読んだ人は、上記のようなことにほとんど気づくことはできないと思われる。ドイツ語に堪能な人（たとえばドイツ人）がドイツ語原文を読んでも、おそらく気づかないのではなかろうか。たいていは本文を読み始めるまえに、訳者やドイツ語版全集の編集者たちの解説を読み、先入観を植えつけられているからである。

少なくとも「第一章 商品」は“対話篇”つまり“ディアレクティーク”である。対話篇として読み進めれば、従来のさまざまな論争のタネはすべて消え去り、そこには首尾一貫したマルクスの分析と考察のプロセスを読み取ることができる。逆に、第一章のどの部分のどの文章もすべてマルクス自身が自らの考えを叙述した文章であるという思い込みのもとに読むと、マルクス自身の思考の脈略がたどれなくなったり、つじつまが合わなくなったり、論述が前後で矛盾している、といった部分が多く出てきてしまう。そのため、これまで多数の論者・研究者たちが論争を展開してきたのだと考えられる。以下は、このような私の読み方によるマルクスの論理展開の追跡である。

## 第一節 使用価値と価値

資本主義的生産様式が支配的に行われている社会の富は、一つの「巨大な商品の集まり」として現われ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現われる。それゆえ、われわれの研究は商品の分析から始まる。(49ページ)

これは『資本論』第一章「商品」の冒頭の文章である。既述のように、これは換言すれば、富が“商品”という姿をとらない社会も存在した（存在する）ということでもある。その社会は、資本主義的な生産様式ではないある種の生産様式をとっていた（いる）。そしてその社会の人びとは、自分たちの富であるさまざまな品物を、“交換（売買）”によらずに互いにやりとりしていた（いる）、ということでもある。

マルクスは、後者のような社会については本書のところどころで必要に応じてごく手短かに触れているだけである。『資本論』の目的は当時の現代西欧社会の解剖学的研究であるが、しかしそれは、後者のような社会との比較検討を基に進められるのである。人びとの富の大部分が、“商品”という姿をとる社会を一方の極とすれば、他方の極は、富がまったく“商品”という姿をとらない社会である。さまざまな地域と時代に存在した多くの社会は、後者の極と前者の極の間のどこかに位置づけられるであろうし、一つの社会の内部に双方の位相が重層化して共存する、そのような社会もある（あった）であろう。以下では便宜上しばらく、富が商品という姿をとって現われる社会を“モダン社会”と呼び、他方の富が商品という姿をとらない（とらなかった）社会を“アルカイック

ク社会”と呼ぶことにする。

マルクスは商品の分析から本書の研究を始めるにあたって、最初に、商品とはいかなるものか、と問う。経済学者たちの答えは、簡潔にまとめて表現すれば、商品とは使用価値であると同時に交換価値でもある、そのような品物だ、ということである。これら「使用価値」、「交換価値」および「価値」などの用語は、当時の経済学の既存の用語と概念であって、マルクスがはじめて概念規定した言葉ではない。彼はあくまでも、あなたたちが用いているこれらの概念は、あなたたちの考えを突き詰めて表現すると、これこれこういう内容になりますよね、と確めているのである。

マルクスは彼らの答えを次のように言い換える。商品とは、「まず第一に、外的対象であり、その諸属性によって人間のなんらかの種類の欲望を満足させる物である」(同上)。

しかし、この有用性は空中に浮いているのではない。この有用性は、商品体(品物それ自体:丹野)の諸属性に制約されているので、商品体なしには存在しない。それゆえ、鉄や小麦やダイヤモンドなどという商品体そのものが、使用価値または財なのである。商品体のこのような性格は、その使用属性の取得が人間に費やさせる労働の多少にはかかわりがない。使用価値の考察にさいしては、つねに、一ダースの時計とか一エレのリンネルとか一トンの鉄とかというようなその量的な規定性が前提される。いろいろな商品のいろいろな使用価値は、一つの独自の学科である商品学の材料を提供する。使用価値は、ただ使用または消費によってのみ実現される。使用価値は、富の社会的形態がどんなものであるかにかかわりなく、富の素材的な内容をなしている。われわれが考察しようとする社会形態にあつては、それは同時に素材的な担い手になっている - 交換価値の。(50ページ)

この文章のなかに、経済学者たちとの問答を通して彼が見ぬいた商品なるものの奇妙さが表現されている。使用価値というのは、実際に使用され消費されることによるのみ現実の使用価値となるのであり、だからこそそれら使用価値は、富が社会の違いによりどんな姿をとるかということにはかかわりなく(つまりアルカイック社会であるかモダン社会であるかにかかわりなく)すべての富の素材的な中身をなすのである。ただし、われわれがこれから考察するタイプの社会(モダン社会)においては、それらが同時に“交換価値”なるものの素材的な担い手になっているのですよ。つまり、モダン社会の人びとはそれらに交換価値を担わせているのですよと彼はいう。そして、このことを以下で明確化する。

交換価値についての経済学者たちの見解を要約すると、次のようになるとマルクスはいう。「交換価値は、まず第一に、ある一種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち割合として現われる。それは、時と所によって絶えず変動する関係である。」そこでマルクスは次のようにコメントをはさむ。「それゆえ、交換価値は偶然的なもの、純粹に相対的なものであるように見え、したがって、商品に内的な、内在的な交換価値(Valeur intrinsèque)というものは、

一つの形容矛盾〔*contradictio in adjecto*〕であるように見える（50～51ページ）。そして彼は「このことをもっと詳しく考察してみよう」という。ただしマルクス独特の経済学者たちとの会話（ディアレクティブーク）を通じて　もちろん、彼の文章は会話体では書かれていないのだが　。

ある一つの商品、たとえば1クォーターの小麦は、 $x$ 量の靴墨とか、 $y$ 量の絹とか、 $z$ 量の金とか、要するにいろいろに違った割合の他の諸商品と交換される。だから、小麦は、さまざまな交換価値をもっているのであって、ただ一つの交換価値をもっているのではない。しかし、 $x$ 量の靴墨も $y$ 量の絹も $z$ 量の金その他も、みな1クォーターの小麦の交換価値なのだから、 $x$ 量の靴墨や $y$ 量の絹や $z$ 量の金などは、互いに置き替えられうる、または互いに等しい大きさの、諸交換価値でなければならない。そこで、第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの同じものを表わしている、ということになる。しかし、第二に、およそ交換価値は、ただ、それとは区別される或る実質の表現様式、「現象形態」でしかありえない、ということになる。

さらに、二つの商品、たとえば小麦と鉄をとってみよう。それらの交換価値がどうであろうと、この関係は、つねに、与えられた量の小麦がどれだけかの量の鉄に等置されるという一つの等式で表わすことができる。たとえば、1クォーターの小麦 =  $a$ ツェントナーの鉄　というように。この等式はなにを意味しているのか？　同じ大きさの一つの共通物が、二つの違った物のうちに、すなわち1クォーターの小麦のなかにも $a$ ツェントナーの鉄のなかにも、存在するということである。だから、両方とも或る一つの第三のものに等しいのであるが、この第三のものは、それ自体としては、その一方でもなければ他方でもないのである。だから、それらのうちのどちらも、それが交換価値であるかぎり、この第三のものに還元できるものでなければならないのである。（51ページ）

1クォーターの小麦の交換価値は、われわれの目に見える姿かたちとしては、いろいろ違った分量の他のさまざまな品物として表わされる。しかもそれらはみな1クォーターの小麦の交換価値なのだから、それらは互いに置換可能な、等しい大きさの諸交換価値だということになる。そこで第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値　目に見える姿かたちとしてのある妥当な分量のさまざまな種類の品物　は、一つの同じものを表わしていることになる。ただしその同じものはいまだ五感でもって確かめることはできないのだが。とすると、同じ商品の目に見える姿かたちとしてのもろもろの交換価値は、それらとは区別され異なるあるもの　目には見えないある内実　が、目に見えるもろもろの姿かたちをとって現われたという意味での「現象形態」でしかありえない、ということになる。では、目に見えない「或る実質」とはいかなるものか。

上掲の引用文の前段とともに、後段も経済学者たちの思考を跡づけながら彼が要約した文章である。「或る実質」とは何かを確かめるために、上段の内容を再度、後段では互いに交換される2つの商品、あるいはある商品の交換価値である2つの商品について考えてみよう。そうすると、たとえ

ば「1クォーターの小麦 = aツェントナーの鉄」というように、x量の品物Aはy量の品物Bに等置されるという一つの等式で表わすことができる。「この等式はなにを意味しているのか？」

1クォーターの小麦 = aツェントナーの鉄

この左辺と右辺はまったく相異なる品物であることは、このモダン社会の人びとは、大人はもとより幼児でさえも、そしてこの社会の経済学者たちも、みんな承知している。しかもそのうえで、左辺と右辺は等しい・同じである、と（幼児はとまどうかも知れないが）みんなが一致して表明する。ということは、二つの異なる品物のうちに同じ大きさの一つの共通のものが内在しているというわけであり、左辺と右辺の品物双方ともある同一の第三のもの（「或る実質」）に等しいのだが、それは姿かたちが目に見えない存在なのだから それ自体としては左辺の品物でも右辺の品物でもないあるものである。

以上は経済学者たちの見解を跡づけ要約した文章だから、ここまでは彼らも異をとらえるはずがない。そこでマルクスは、彼らの見解に基づいて、さらに論を進める。

……、諸商品の諸交換価値は、それらがあるいはより多くあるいはより少なく表わしている一つの共通なものに還元されるのである。

この共通のものは、商品の幾何学的とか物理学的とか化学的などというような自然的な属性ではありえない。およそ商品の物的な属性は、ただそれらが商品を有用にし、したがって使用価値にするかぎりでしか問題にならないのである。ところが、他方、諸商品の交換関係を明白に特徴づけているものは、まさに諸商品の使用価値の捨象なのである。この交換関係のなかでは、ある一つの使用価値は、それがただ適当な割合でそこにありさえすれば、ほかのどの使用価値ともちょうど同じだけのものと認められるのである。あるいは、かの老パーボンが言っているように、

「一方の商品種類は、その交換価値が同じ大きさならば、他方の商品種類と同じである。同じ大きさの交換価値をもつ諸物のあいだには、差異や区別はないのである。」（51～52ページ）

「1クォーターの小麦 = aツェントナーの鉄」

この左辺と右辺は互いにまったく違う品物であること、しかもそれを承知のうえで双方は同じであると全員一致で表明していることからすれば、それぞれの品物が小麦であり鉄であることを特徴づけ、小麦および鉄という使用価値の基盤となっている物的・自然的な諸属性を捨象しているわけだ。あなたたちの老パーボン先生も上掲のように言っているのだから。以上を要約すれば次のようになりますね。

使用価値としては、諸商品は、なによりもまず、いろいろに違った質であるが、交換価値としては、諸商品はただいろいろに違った量でしかありえないのであり、したがって一分子の使用価値も含んではいけないのである。（52ページ）

「交換価値としては、諸商品はただいろいろに違った量でしかありえない」ことになった。では、何の量か？ 上記の「一つの同じもの」、「或る実質」、「共通なもの」の量である。諸商品の中のある内実の量が等しいときに、それらは互いに交換される、というわけである。

それでは、商品としての双方の品物・使用価値を問題にしない 捨象する ことにすれば、商品体に残るものは何なのですか？ 経済学者たちは答える。「ただ労働生産物という属性だけである」(52ページ)。そこでマルクスは、彼らはそう言うが、さまざまな商品・品物は結局のところいずれも人間の労働の生産物であると言うけれど、「しかし、この労働生産物も、われわれの気がつかないうちにすでに変えられている」のだとコメントする。

そこで商品体の使用価値を問題にしないことにすれば、商品体に残るものは、ただ労働生産物という属性だけである。しかし、この労働生産物もわれわれの気がつかないうちにすでに変えられている。労働生産物の使用価値を捨象するならば、それを使用価値にしている物的な諸成分や諸形態をも捨象することになる。それは、もはや机や家や糸やその他の有用物ではない。労働生産物の感覚的性状はすべて消し去られている。それはまた、もはや指物労働や建築労働や紡績労働やその他の一定の生産的労働の生産物でもない。労働生産物の有用性といっしょに、労働生産物に表わされている労働の有用性は消え去り、したがってまたこれらの労働のいろいろな具体的形態も消え去り、これらの労働はもはや互いに区別されることなく、すべてことごとく同じ人間労働に、抽象的人間労働に、還元されているのである。(52ページ)

商品として交換される品物のそれぞれの使用価値を捨象したとき、それらに残っている属性は、いずれも人間の労働の産物だという属性である。ということは、「或る実質」、「一つの同じもの」、「共通なもの」とは“人間の労働”であり、交換価値としては、諸商品はただ“人間の労働”のいろいろに違った量でしかない、ということになる。しかし、この労働生産物も人間の労働も、われわれの気がつかないうちに経済学者たちによってすでに変えられているのだとマルクスは注意する。彼らのいう労働生産物や人間の労働とは、使用価値の捨象とともにすべての具体的有用性をも捨象してしまった、まったく抽象的な労働生産物と人間労働に還元されているのだと。

そこで今度はこれらの労働生産物に残っているものを考察してみよう。それらに残っているものは、同じまぼろしのような対象性のほかにはなにもなく、無差別な人間労働の、すなわちその支出の形態にはかわりのない人間労働力の支出の、ただの凝固物のほかにはなにもない。これらの物が表わしているのは、ただ、その生産に人間労働力が支出されており、人間労働が積み上げられているということだけである。このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として、これらのものは価値 商品価値なのである。(52ページ)

「このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として、これらのものは価値 商品価値なのである」という文章は、マルクスがここで新たに価値を定義づけた文章ではない。経済学者たちはこのようなものを指して価値 商品価値と呼んでいるのだ、と言うのである。「このようなそれらに共通な社会的実体」とは、彼らが諸商品のなかに 現実には顕微鏡を使っても化学分析を通して目に見えないにもかかわらず 内在すると考える「まぼろし（幽霊：丹野）のような対象性」、つまり交換を通じて物をやりとりするこの社会（モダン社会）の人びととかれらの理論家たる経済学者たちにとっての、それらに共通な（現実の自然の実体ではない）社会的実体のことである。

さきにマルクスは、「われわれが考察しようとする社会的形態にあっては、それは同時に素材的な担い手になっている 交換価値の」（50ページ、傍点は丹野）と指摘していた。商品が担わされている交換価値なるものの内実は以上のようなものであり、誰がそれを担わせているのかといえ、この社会（モダン社会）の人びとである。

諸商品の交換関係そのもののなかでは、商品の交換価値は、その使用価値にまったくかわりがないものとしてわれわれの前に現われた。そこで、実際に労働生産物の使用価値を捨象してみれば、ちょうどいま規定されたとおりの労働生産物の価値が得られる。だから、商品の交換関係または交換価値のうちに現われる共通物は、商品の価値なのである。（53ページ）

そして彼は、以下の検討の手順について読者に次のように注意を促している。

研究の進行は、われわれを、価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値につれもどすことになるであろう。しかし、この価値は、さしあたりまずこの形態にはかわりなしに考察されなければならない。（同上）

経済学者たちのいう商品の価値とは、以上のような まぼろし（幽霊）のような対象性であり、無差別な人間労働の、すなわちその支出の形態にはかわりのない人間労働力の支出の、ただの凝固物という、ある社会的実体の結晶 を指しているのだ。とはいえ、そのまぼろし・幽霊のような内実にもかかわらず、それは商品の交換関係のなかでは、現実にも目に見えずに触れられる姿かたち 「その必然的な表現様式または現象形態」 をとって現われる。だけど、その考察に進むまえに、まだ経済学者との会話を通じて確かめるべきことがある、と彼は言うのである。

だから、ある使用価値または財貨が価値をもつのは、ただ抽象的人間労働がそれに対象化または物質化されているからでしかない。では、その価値の大きさはどのようにして計られるのか？ それに含まれている「価値を形成する実体」の量、すなわち労働の量によってである。労



働の量そのものは、労働の継続時間で計られ、労働時間はまた1時間とか1日とかというような一定の時間部分をその度量標準としている。(53ページ)

この文章の中間の質問に対する答えは、経済学者たちの答えである。もちろん彼らも、ある商品の価値の大きさはその生産中に支出される労働の量によって計られるからといって、その商品を実際に生産したある人が支出した実労働時間を、単純に価値としての労働量だとはみなさない。だからマルクスは彼らの見解にそって、その次の段落を次のような文章で始めている。

一商品の価値がその生産中に支出される労働の量によって規定されているとすれば、ある人が怠惰または不熟練であればあるほど、彼はその商品を完成するのにそれだけ多くの時間を必要とするので、彼の商品はそれだけ価値が大きい、というように思われるかもしれない。しかし、諸価値の実体をなしている労働は、同じ人間労働であり、同じ人間労働力の支出である。商品世界の諸価値となって現われる社会の総労働力は、無数の個別的労働力から成っているのではあるが、ここでは一つの同じ人間労働力とみなされるのである。(53ページ)

ここまでは、経済学者の考え方にマルクスが新たに付加したこと何もない。これに続く文章は、さまざまに異なる「無数の個別的労働力」は、それらの生産物が諸商品として交換売買の世界に投入されるなかで、どのようなプロセスと論理を経て「一つの同じ人間労働力とみなされる」に至るのか、の説明である。ここでも、彼は経済学の論理を突きつめて展開しまたは整理してみればこうなる、と述べているだけである。もちろん、彼以前に以下の引用文ほど明確に述べることができた経済学者はいなかったのであろうが。

これらの個別的労働力のおのおのは、それが社会的平均労働力という性格をもち、このような社会的平均労働力として作用し、したがって一商品の生産においてもただ平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間だけを必要とするかぎり、他の労働力と同じ人間労働力なのである。社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的に正常な生産条件と、労働の熟練及び強度の社会的平均度とをもって、何らかの使用価値を生産するために必要な労働時間である。たとえば、イギリスで蒸気機関が採用されてからは、一定量の糸を織物に転化させるためにはおそらく以前の半分の労働で足りたであろう。イギリスの手織工はこの転化に実際には相変わらず同じ時間を必要としたのであるが、彼の個別的労働時間の生産物は、いまでは半分の社会的労働時間を表わすにすぎなくなり、したがって、その以前の価値の半分に低落したのである。(53ページ)

この文章の中で、読者としてのわれわれが注意を払わなければならないことが2点ある。第一は、ここで「社会的…」という言葉が何ヵ所かで使われていること、そして、本稿の7ページに引

用した文章の中にも、「……このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として、これらのものは価値 商品価値なのである」(52ページ) というように「社会的…」という言葉が用いられていることである。この双方の文章に出てくる「社会的」という言葉は同じ意味なのか、違う意味で用いられているのか？

第二は、ここで述べられている「社会的平均労働力」または「社会的に必要な労働時間」と、52ページの文章の「このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として、……」における「社会的実体」は、同じものを指しているかと読解してよいのか否か、という問題である。

最初に、52ページの「社会的実体」とは、本稿の8ページで述べたように商品として交換・売買される品物 個別具体的な有用労働によって生産された各種の品物(使用価値) から、当の有用性の基礎である当の品物の自然の(五感でもって確かめられる)諸属性を捨象し、と同時にそれらを付与した具体的な有用労働をも捨象したうえで、人びとがその品物のうちに担わせている抽象的人間労働の産物という属性、つまり当の物自体の自然の属性ではないという意味で社会的な属性

社会的実体 を指している。これは、マルクスが経済学者とのディアレクティークを通して論証してみせた、彼自身の分析結果である。

他方、53ページの「社会的」は、ある社会の中の人びとのさまざまな労働能力などについて統計処理を(思考実験的に)行なったときの平均値、という意味で用いられている。ここに一つの社会がある。その人びとは、彼ら全体のために必要なさまざまな種類と量の使用価値を生産している。この社会においても総労働力は無数の個別的労働力から成っている。怠惰な人もいれば熱心な人もいるし、病気がちだったり身体に障害のある人もいる。熟練の度合いもさまざまである。ただしこの社会の人びとは、彼らの総労働生産物を交換・売買によらずに、つまり商品という形態をとらずに流通させ消費しているとしよう アルカイック諸社会のように。この社会でも、“一人前の男性や女性”として期待される平均的な労働力という社会的目安を人びとは有しているであろう。しかし、おまえは半人前だから一人前の半分しか物を消費してはならぬ ということはないし、個々人の個別的労働力を、「一つの同じ人間労働力とみなす」こともしない。

ところが、この社会が、交換を通じて生産物を流通させる(品物はすべて商品である)となると 交換によらずして自分の物は手放さず、他人の物を得られないとなると、「商品世界の諸価値となって現われる社会の総労働力は無数の個別的労働力から成っているのではあるが、ここでは一つの同じ人間労働力とみなされるのである」。そして、「これらの個別的労働力のおのおのは、この社会の人びとと自身がそれらをどのように取り扱うことによって「他の労働力と同じ人間労働力」だとみなされるのか。「それが社会的平均労働力という性格をもち、このような社会的平均労働力として作用し、したがって一商品の生産においてもただ平均的に必要な労働時間だけを必要とするかぎり」においてである。ちなみに、「社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的に正常な生産条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、なんらかの使用価値を生産するために必要な労働時間である」(53ページ：傍点は丹野)。

それゆえ、上記の第二の問題の答えは、否である。前者は、“商品の使用価値であると同時に価値でもある”というその価値なるものは、当の品物に固有の自然の属性ではない、モダン社会の人びとが物に担わせた社会的属性だということである。後者は、モダン社会の人びとが商品としての品物に担わせた価値という社会的属性の大きさを、この社会の人びと自身はどのようにして計るのか、と問いただした際の回答としての、上記のように規定される「社会的に必要な労働時間」である。

だから、ある使用価値の価値量を規定するものは、ただ、社会的に必要な労働の量、すなわち、その使用価値の生産に社会的に必要な労働時間だけである。個々の商品は、ここでは一般に、それが属する種類の平均見本とみなされる。したがって、等しい大きさの労働量が含まれている諸商品、または同じ労働時間で生産されることのできる諸商品は、同じ価値量を持っているのである。一商品の価値と他の各商品の価値との比は、一方の商品の生産に必要な労働時間と他方の商品の生産に必要な労働時間との比に等しい。「価値としては、すべての商品は、ただ、一定の大きさの凝固した労働時間でしかない。」(53～54ページ)

それゆえ、もしもある商品の生産に必要な労働時間が変わらなければ、その商品の価値の大きさも不変であろう。しかし、この労働時間は、労働の生産力に変動があれば、そのつど変動する。労働の生産力は多種多様な事情によって規定されており、なかでも特に労働者の技能の平均度、科学とその技術的応用可能性との発展段階、生産過程の社会的結合、生産手段の規模および作用能力によって、さらにまた自然事情によって、規定されている。……(中略)……一般的に言えば、労働の生産力が大きければ大きいほど、一物品の生産に必要な労働時間はそれだけ小さく、その物品に結晶している労働量はそれだけ小さく、その物品の価値はそれだけ小さい。逆に、労働の生産力が小さければ小さいほど、一物品の生産に必要な労働時間はそれだけ大きく、その物品の価値はそれだけ大きい。つまり、一商品の価値の大きさは、その商品に実現される労働の量に正比例し、その労働の生産力に反比例して変動するのである。(54～55ページ)

以上が、経済学における商品価値についての論理の要点である。商品の中に凝固している価値、その幽霊のような対象性、「無差別な人間労働の、すなわちその支出の形態にはかわりのない人間労働力の支出のただの凝固物」としての価値の大きさは、さまざまな要因と状況によってそのつど変動する。だから、個々の商品を手にとっていくら詳細に調べても、それに宿っている価値の大きさはわからない。商品の価値はもとより、価値の大きさも、ともに幽霊のような対象性なのである。

## 第二節 商品に表わされる労働の二重性

すでに見たように、「しかし、(商品としての)この労働生産物も、われわれの気がつかないうちにすでに変えられている」とマルクスは指摘していた。そして第一節での分析をもとに、第二節の冒頭で彼は次のように述べる。

最初から商品はわれわれにたいして二面的なものとして、使用価値および交換価値として、現われた。次には、労働も、それが価値に表わされているかぎりでは、もはや、使用価値の生みの母としてのそれに属するような特徴をもってはいないということが示された。このような、商品に含まれている労働の二面的な性質は、私をはじめて批判的に指摘したものである。この点は、経済学の理解にとって決定的な跳躍点であるから、ここでもっと詳しく説明しておかなければならない。(56ページ)

人びとの労働の産物が互いに交換(売買)され、商品となるのは、古今東西のすべての社会に共通したことでない。顕著なかたちでそれが現われるのは、「われわれが(本書で)考察しようとする社会形態」においてである、と彼は最初に注意を喚起していた。そして、この社会における「このような、商品に含まれている労働の二面的性格は、私をはじめて(前著の『経済学批判』で)批判的に指摘した」ことなのだと言ふ。つまり、経済学者たちはこのことに気づかず、これを一緒くたにして論を展開している、というわけである。だから彼は続けて言う。「この点は、経済学の理解にとって決定的な跳躍点であるから、ここでもっと詳しく説明しておかなければならない。」

これはどういう意味か。本書の読者たちが経済学を理解するためには、この点が決定的に重要なことから、…… という意味か、それとも、読者たちが“経済学なる学問”(経済学の論理)がいかなるものなのかを見きわめるための、決定的な跳躍点なのだから、…… という意味か。マルクスは明らかに後者の意味で述べているのである。前著と同様に、本書『資本論』もその副題を「経済学批判」としており、経済学の批判のための書なのだから。

この「第二節 商品に表わされる労働の二重性」におけるマルクスの文体は、これまで見てきた「第一節 商品の二つの要因 使用価値と価値(価値実体 価値量)の文体と明らかに異なる。その理由は上掲の引用文中に示されている。それを再掲する。

このような、商品に含まれている労働の二面的な性質は、(前著『経済学批判』で：丹野)私をはじめて批判的に指摘したものである。この点は、経済学の理解(上述のような意味での：丹野)にとって決定的な跳躍点であるから、ここでもっと詳しく説明しておかなければならない。

第一節の文章は、見た目には地の文のように書かれているが、それはマルクスが自分自身の見解

を叙述した文章ではなく、本書の「第二版後記」(27ページ)で触れているように、彼独特のディアレクティーク(弁証法・会話法)の表現形式であることを、われわれはこれまでに見てきた。

他方、この第二節は、マルクスが前著で(経済学者たちとの彼独特の問答法を通して)彼自身はじめて批判的に指摘したこと、しかも経済学なる学問を見きわめるための決定的な跳躍点でもあることを、「ここでもっと詳しく説明」する部分である。だからここでは、彼は商品に含まれている労働の二面的な性質について、彼自身の見解をまさに叙述し説明しているのであり、そのために第一節の文体とは異なる文体になっているのである。第二節は平易な叙述の文章で書かれている。

以上のことを念頭においてこの第二節を読むがぎり、どの部分をとっても読者の困惑を招くようなことは書かれていない。困惑する読者(実際に多くの読者・研究者が困惑し、互いに議論を展開しているようだ)は、第一節も第二節も、そしてこれに続く第三節も、しかもそれらのどの部分も、マルクスが自分自身の論理と思考を展開して叙述した文章だと誤解しているからである。こうした誤解のうえでこれら三つの節内のおよび節間の論述を追い、また同一のことがらに関する前後の文章を比較すると、マルクス自身が前後で矛盾した変てこな論述をあちらこちらでやっているように見えてしまうのである。

この第二節のなかで、マルクスは、われわれが便宜上モダン社会とアルカイック社会と呼ぶ二つのタイプの社会を、ごく手短かに以下のように比較検討している。

いろいろに違った使用価値または商品体の総体のうちには、同様に多種多様な、属や種や科や亜種や変種を異にする有用労働の総体 社会的分業が現われている。社会的分業は商品生産の存在条件である。といっても、商品生産が逆に社会的分業の存在条件であるのではない。古代インドの共同体では、労働は社会的に分割されているが、生産物が商品になるということはない。あるいはまた、もっと手近な例をとってみれば、どの工場でも労働は体系的に分割されているが、この分割は、労働者たちが彼らの個別的生産物を交換することによって媒介されてはいない。ただ、独立に行なわれていて互いに依存し合っていない私的労働の生産物だけが、互いに商品として相対するのである。

こうして、どの商品の使用価値にも、一定の合目的的な生産活動または有用活動が含まれているということがわかった。いろいろな使用価値は、それらのうちに質的に違った有用労働が含まれていなければ、商品として相対することはできない。社会の生産物が一般的に商品という形態をとっている社会では、すなわち商品生産者の社会では、独立生産者の私事として互いに独立に営まれるいろいろな有用労働のこのような質的な相違が、一つの多肢的体制に、すなわち社会的分業に、発展するのである。(56~57ページ)

ここでのアルカイック社会の例というのは、「古代インドの共同体」である。ただし、「古代インドの」は誤訳で、正しくは「インド古来の」である。彼の執筆時点での現在のインドの、しかも古

来の姿を保っている共同体である。その「インド古来の共同体では、労働は社会的に分割されているが、(共同体の人びとの間では)生産物が商品になるということはない」。彼らの分業による生産物は、交換されることなく、共同体の人びとがそれらを 共にする、分かち合う = to share のである。つまり、交換以前にまたは交換なしに、社会的分業は行なわれていた、ということである。「ただ、独立に行なわれていて互いに依存し合っていない私的労働の生産物だけが、互いに商品として相対するのである」。

また、彼は58~59ページの段落の最後のところで、本書における以後の論述と分析を展開するにあたっての重要でかつ必要不可欠ともいべき前提条件を導入している。かなり長くなるが、この段落全体を以下に引用する。

そこで今度は、使用対象であるかぎりでの商品から商品 価値に移ることにしよう。

われわれの想定によれば、上着はリンネルの2倍の価値をもっている。しかし、それはただ量的な差異にすぎないもので、このような差異はさしあたりはまだわれわれの関心をひくものではない。そこで、われわれは、1着の上着の価値が10エレのリンネルの価値の2倍であれば、20エレのリンネルは1着の上着と同じ価値量をもっているということを思い出す。価値としては、上着とリンネルとは、同じ実体をもった物であり、同種の労働の客体的表現である。ところが、裁縫と織布とは、質的に違った労働である。とはいえ、次のような社会状態もある。そこでは同じ人間が裁縫をしたり織布をしたりしているので、この二つの違った労働様式は、ただ同じ個人の労働の諸変形でしかなく、まだ別々の諸個人の特殊な固定した諸機能にはなっていないのであって、それは、ちょうど、われわれの仕立屋が今日つくる上着も彼が明日つくるズボンもただ同じ個人労働の諸変形を前提しているにすぎないようなものである。さらに、一見してわかるように、われわれの資本主義社会では、労働需要の方向の変化に従って、人間労働の一定の部分が、あるときは裁縫の形態で、あるときは織布の形態で供給される。このような労働の形態転換は、摩擦なしにはすまないかもしれないが、とにかくそれは行なわれなければならない。生産活動の規定性、したがってまた労働の有用的性格を無視するとすれば、労働に残るものは、それが人間の労働力の支出であるということである。裁縫と織布とは、質的に違った生産活動であるとはいえ、両方とも人間の脳や筋肉や神経や手などの生産的支出であり、この意味で両方とも人間労働である。それらは、ただ、人間の労働力を支出するための二つの違った形態でしかない。たしかに、人間の労働力そのものは、あの形態やこの形態で支出されるためには、多少とも発達していなければならない。しかし、商品の価値は、ただの人間労働を、人間労働一般の支出を、表わしている。ところで、ブルジョア社会では将軍や銀行家は大きな役割を演じており、これに反してただの人間はひどくみすばらしい役割を演じているのであるが、この場合の人間労働についても同じことである。それは、平均的にだれでも普通の人間が、特別の発達なしに、自分の肉体のうちにもっている単純な労働力の支出である。もちろん、単純な平均労働そのものも、国が違い文

化段階が違えばその性格は違うのであるが、しかし、現に在る一つの社会では与えられている。より複雑な労働は、ただ単純な労働が数乗されたもの、またはむしろ数倍されたものとみなされるだけであり、したがって、より小さい量の複雑労働がより大きい量の単純労働に等しいということになる。このような換算が絶えず行われているということは、経験の示すところである。ある商品がどんなに複雑な労働の生産物であっても、その価値は、その商品を単純労働の生産物に等置するのであり、したがって、それ自身ただ単純労働の一定量を表しているにすぎないのである。いろいろな労働種類がその度量単位としての単純労働に換算されるいろいろな割合は、一つの社会的過程によって生産者の背後で確定され、したがって生産者たちにとっては慣習によって与えられたもののように思われる。簡単にするために、以下では各種の労働力を直接に単純労働力とみなすのであるが、それはただ換算の労を省くためにすぎない。(58～59ページ：最後の部分の傍点は丹野)

### 第三節 価値形態または交換価値

第三節の最初の段落は以下のような文章である。

商品は、使用価値または商品体の形態をとって、鉄やリンネルや小麦などとして、この世に生まれてくる。これがありのままの現物形態である。だが、それらが商品であるのは、ただ、それらが二重なものであり、使用対象であると同時に価値の担い手であるからである。それゆえ、商品は、ただそれが二重形態、すなわち現物形態と価値形態とをもつがぎりでのみ、商品として現われるのであり、言い換えれば商品という形態をもつのである。(62ページ：傍点は丹野)

マルクスは本書第一章の冒頭で、われわれがすでに見たように、モダン社会では富は諸商品という姿をとって現われ、この社会の富の基本形態は一つ一つの商品という姿かたちをとる；だから、本書のメインテーマは“資本”なのだが、商品の分析から始めるのだ、と言っていた。この第三節も引き続き商品の分析である。だから上掲の引用文のような表現をとることになる。そこでこの文章を、アルカイック社会からモダン社会への移行に伴って、人びとの労働の生産物がどう姿かたちを変えるのか、という観点から私が換言してみると、以下のようになる。

どの時代のどの社会の人びとも、生産の現場で現実には生み出しているのは、鉄やリンネルや小麦等々というありのままの具体的な品物である。それらは、どの時代のどの社会にあっても、それぞれの社会の人びとの間で移動し手渡され、最後は消費される。だが、われわれが本書で考察するモダン社会の人びとは、自分たちの労働の産物を交換(売買)を通してのみ手放すと同時に受け取ることを、相互間での物の移動の基本原則としている。彼らは互いに交換する品物を“商品”と呼び、当の品物に備わる自然の属性ではないある社会的な属性を担わせる。ただし彼らは、それが当の品

物に内在している属性・実体だと錯覚している。そしてそれを価値と呼んでいる。では、ある商品たとえば20エレのリンネルが彼らにとっては使用価値であると同時に価値でもあるとしたら、それが20エレという長さのリンネルという使用価値であることは現物の姿かたち（形態）そのものが明示しているが、それがある大きさの価値であるというその価値は、どんな姿かたち（形態）をとって彼らの目に現われるのか？　これ自体が価値である　といっても、20エレのリンネルそのものに備わっている五感でもって確かめられる諸属性をすべて捨象してしまつてなおかつそれに残っている（と彼らが考える）幽霊のような属性を指すわけだから、当の品物は価値そのものの姿かたちを自分自身の現物形態で表現することはできない。にもかかわらず、この社会の人びとは、その品物の価値とその大きさの姿かたち（価値形態）を見てとることができるらしい。彼らはどうやって価値形態を表現し、見てとることができるのか？　これがこの第三節での分析課題だ、というわけである。そしてマルクスは次のように分析を始める。

商品の価値対象性は、どうにもつかまへようのわからないしろものだということによって、マダム・クイックリとは違っている。商品体の感覚的に粗雑な（目に見え手触り確かな：丹野）対象性とは正反対に、商品の価値対象性には一分子も自然素材ははいっていない。それゆえ、ある一つの商品をどんなにいじりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまへようがないのである。とはいへ、諸商品は、ただそれらが人間労働という同じ社会的な単位の諸表現であるかぎりでのみ価値対象性をもっているのだということ、したがって商品の価値対象性は純粋に社会的であるということ思い出すならば、価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちにはしか現われえないということもまたおのずから明らかである。われわれも、じっさい、諸商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている価値を追跡したのである。いま、われわれは再び価値のこの現象形態に帰らなければならない。（62ページ）

上掲の文章のうち、「諸商品は、ただそれらが人間労働という同じ社会的な単位の諸表現であるかぎりでのみ価値対象性をもっているのだということ」とは、価値としての諸商品は、すでに見たように一つと同じ人間労働（同一の人間労働力の支出）という社会的に同一視されたものの諸表現である限りでのみ、この社会の人びとにとってそれらは価値であるという価値対象性をもつことになるのだ、という意味である。「したがって商品の価値対象性は純粋に社会的であるということ」とは、商品の価値なるものはその物自体に備わった自然の属性に基づくのではないのだから、この社会の人びとにとっての　彼らが物に担わせた　純粋に社会的なものである、という意味である。したがって、すでに明らかになったこれらのことを「思い出すならば、価値対象性は商品と商品との社会的な関係」　換言すれば、ある商品と別の商品とを互いに交換しようとする人びとの間の（この社会に特有の）ある社会的な関係が、あたかも商品と商品という物どうしの間の関係であるかのようにそれらに担わされた、という意味での商品間の社会的な関係　「のうちにはしか現われ



えないということもおのずから明らかである。」

第一節と第二節でマルクスは、商品の価値なるものについて、さしあたりその「必然的な表現様式または現象形態としての交換価値」にかかわりなしに考察してきたが、53ページで予告しておいたように、彼はこの第三節で「われわれは再び価値の現象形態に帰らなければならない」と述べ、再び経済学者たちとのディアレクティブクのもとに分析を進める。ここで彼が目指す課題は以下のことである。

諸商品は、それらの使用価値の雑多な現物形態とは著しい対照をなしている一つの共通な価値形態 貨幣形態をもっているということだけは、だれでも、ほかのことはなにも知っていなくても、よく知っていることである。しかし、いまここでなされなければならないことは、ブルジョア経済学によってただ試みられたことさえないこと、すなわち、この貨幣形態の生成を示すことであり、したがって、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な最も目だたない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡することである。これによって同時に貨幣の謎も消え去るのである。(62ページ)

彼は課題を解決するための第一段階を次のように設定する。

最も単純な価値関係は、明らかに、なんであろうとただ一つの異種の商品にたいするある一つの商品の価値関係である。それゆえ、二つの商品の価値関係は、一商品のための最も単純な価値表現を与えるのである。(62ページ)

そして彼は、はじめに次のように読者へ注意を促す。

すべての価値形態の秘密は、この単純な価値形態のうちにひそんでいる。それゆえ、この価値形態の分析には固有な困難がある。(63ページ)

蛇足だが、その固有な困難のゆえに彼の以下の分析が中途半端なレベルにとどまっているなどと、まえもって言分けしているのではない。その固有な困難のゆえに、経済学者たちのこれまでの分析はその最良のものでさえ中途半端にとどまり、挫折したり誤った結論に至らざるをえなかった。それほどの困難を以下の分析では克服しなければならない。だから読者もともに克服してほしい、と言外に述べているのである。

- A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態
  - 1 価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態

ここで分析の俎板に上っているのは、二つの商品の次のような価値関係であり、最も単純な価値形態である。

$x$  量の商品 A =  $y$  量の商品 B または  $x$  量の商品 A は  $y$  量の商品 B に値する。  
(20エレのリンネル = 1 着の上着、または20エレのリンネルは 1 着の上着に値する。)(63ページ)

この二つの商品間の価値関係 つまりそれらの社会的な関係 が、一商品のための最も単純な価値表現 つまり価値形態 を与えるのだとマルクスは述べ、これを以下のように解説し提示する。

ここでは二つの異種の商品 A と B、われわれの例ではリンネルと上着は、明らかに二つの違った役割を演じている。リンネルは自分の価値を上着で表わしており、上着はこの価値表現の材料として役だっている。第一の商品は能動的な、第二の商品は受動的な役割を演じている。第一の商品の価値は相対的価値として表わされる。言いかえれば、その商品は相対的価値形態にある。第二の商品は等価物として機能している。言いかえれば、その商品は等価形態にある。  
(63ページ)

私は経済学の素人だが、これはマルクスがはじめて  $x$  量の商品 A =  $y$  量の商品 B という関係を切開して見せた、その切り口に現われた姿であろうと思われる。それまでの経済学者たちも、 $x$  量の商品 A =  $y$  量の商品 B のうちに、異種の二つの品物が物として同じだということが表現されているのではけっしてない、と承知していた。では、何が同じなのか？  $x$  量の商品 A の価値量と  $y$  量の商品 B の価値量は等しい・同じである ことを表現しているとしか思い及ばなかった。しかしこれでは、前者の価値量は後者の価値量と等しい(及びその逆)というだけで、前者の価値とその量も後者のそれらも、目に見える姿かたち(価値形態)として現われないではないか。違うのだよ、それぞれの商品の関係は上述のようなそれぞれの商品の立場を表現しているのだよ、というわけである。

もちろん、20エレのリンネル = 1 着の上着 または、20エレのリンネルは 1 着の上着に値するという表現は、1 着の上着 = 20エレのリンネル または 1 着の上着は20エレのリンネルに値するという逆関係を含んでいる。しかし、そうではあっても、上着の価値を相対的に表現するためには、この等式を逆にしなければならない。そして、そうするやいなや、上着に代わってリンネルが等価物になる。(63ページ：傍点は丹野)

## 2 相対的価値形態

### a 相対的価値形態の内実

ここでも、マルクスはその最初に、読者に対して次のように注意を促している。

一商品の単純な価値表現が二つの商品の価値関係のうちどのようひそんでいるかを見つけたすためには、この価値関係をさしあたりまずその量的な面からはまったく離れて考察しなければならない。人びとはたいていこれとは正反対のことをやるのであって、価値関係のうちに、ただ、二つの商品種類のそれぞれの一定量が互いに等しいとされる割合だけを見ているのである。人びとは、いろいろな物の大きさはそれらが同じ単位に還元されてからはじめて量的に比較されるようになるということを見落としているのである。ただ同じ単位の諸表現としてのみ、これらの物の大きさは、同名の、したがって通約可能な大きさなのである。(64ページ)

彼がここで提起している問題は、後の方(73ページ以下)で彼自身が解説しているように、じつは2300年以上も前の「あの偉大な探求者」アリストテレスが「はじめて分析し、そして提起した問題であった。アリストテレスがこの問題に取り組んだ結果がどうなったかは、ここでは関係ない。彼の提起した問題こそが、価値形態の秘密を解明するためのカギなのだ。だが、「人びとはたいていこれとは正反対のことをやるのであって、価値関係のうちに、ただ、二つの商品種類の一定量が等しいとされる割合だけを見ている」と彼らを批判するのである。では真の問題とは何か？

「人びとは、いろいろな物の大きさはそれらが同じ単位(同一のもの:丹野)に還元されてからはじめて量的に比較されるようになるということを見落としているのである。ただ同じ単位(同一のもの:丹野)の諸表現としてのみ、これらの物の大きさは、同名の、したがって通約可能な大きさなのである」(64ページ)。かのアリストテレスでさえ匙を投げた、そしてモダン社会の経済学者たちの分析にも手に余るこの難題を、この社会の人びとは無意識のうちに平然と日常的に解決している(すり抜けている)。それはどのような無意識の思考回路を通過してなのか？これをマルクスは以下で解き明かしてみせる。

20エレのリンネル = 1着の上着であろうと、= 20着の上着であろうと、または = x着の上着であろうと、すなわち、一定量のリンネルが多くの上着に値しようと、少ない上着に値しようと、このような割合は、どれでもつねに、価値量としてはリンネルも上着も同じ単位の諸表現であり、同じ性質の諸物であるということを含んでいる。リンネル = 上着というのが等式の基礎である。(64ページ)

リンネル = 上着 は、等式ではない。現物としてのリンネルと上着は、幼児にも分かるように

まったく異なる品物である。この社会の人びとは、そんなことはもちろん承知のうえで、違う品物どうしだからこそそれらを交換する。彼らにとって、それらには目に見えないあるもの　しかも同一のものが内在しているという意味で、等式の基礎なのである。マルクスは続けて次のことを指摘する。

しかし、質的に等置された二つの商品は、同じ役割を演ずるのではない。ただリンネルの価値だけが表現される。では、どのようにしてか？　リンネルが自分の「等価物」または自分と「交換されうるもの」としての上着にたいしてもつ関係によって、である。この関係のなかでは、上着は、価値の存在形態として、価値物として、認められる。なぜならば、ただこのような価値物としてのみ、上着はリンネルと同じだからである。他面では、リンネルそれ自身の価値存在が現われてくる。すなわち独立な表現を与えられる。なぜならば、ただ価値としてのみリンネルは等価物または自分と交換されうるものとしての上着に関係することができるからである。

(64ページ)

リンネル　リンネルを他の品物と交換しようとする人　は、すでに見たように、自分のうちに他の品物にも内在するある同じものが宿っているのだというその同じものの姿かたちを、自分の現物形態そのもので表わすことはけっしてできない。それは商品としての物に担わされた(この社会に特有の)社会的属性なのだから。だからそれは、商品と商品(を交換しようとする人と人)との社会的な関係のうちにしか現われえないのであった。いままさに、リンネルは上着を相手としてこの関係をとりに結ぼうとしているのである。ここでの主体はリンネル(の所持者)である。

つまりこういうことである。

われわれが、価値としては商品は人間労働の単なる凝固である、と言うならば、われわれの分析は商品を価値抽象に還元しはするが、しかし、商品にその現物形態とは違った価値形態を与えはしない。一商品の他の一商品にたいする価値関係のなかではそうではない。ここでは、その商品の価値性格が、他の一商品にたいするそれ自身の関係によって現われてくるのである。

(65ページ)

では、一商品が他の商品と関係するなかで、その商品の価値性格はどのようにして現象形態を現わすか？　そのプロセスを彼は以下で解説する。ただしそれは、マルクス自身の見解ではない。この社会の、一商品を他の商品と交換しようとする人が、無意識のうちに考えかつ現象形態を見てとる、その人(人びと)の無意識の思考回路・プロセスを彼が追跡して解き明かした、その結果の説明である。

たとえば上着が価値物としてリンネルに等置されることによって、上着に含まれている労働は、リンネルに含まれている労働に等置される。ところで、たしかに、上着をつくる裁縫は、リンネルをつくる織布とは種類の違った具体的労働である。しかし、織布との等置は、裁縫を、事実上、両方の労働のうちの現実に等しいものに、人間労働という両方に共通な性格に、還元するのである。このような回り道をして、次には、織布もまた、それが価値を織るかぎりでは、それを裁縫から区別する特徴をもってはいないということ、つまり抽象的人間労働であるということが、言われているのである。ただ異種の諸商品の等価表現だけが価値形成労働の独自の性格を顕わにするのである。というのは、この等価表現は、異種の諸商品のうちにひそんでいる異種の諸労働を、実際に、それらに共通なものに、人間労働一般に、還元するのだからである。

しかし、リンネルの価値をなしている労働の独自の性格を表現するだけでは、十分ではない。流動状態にある人間の労働力、すなわち人間労働は、価値を形成するが、しかし価値ではない。それは、凝固状態において、対象の形態において、価値になるのである。リンネル価値を人間労働の凝固として表現するためにはそれを、リンネルそのものとは物的に違っていると同時にリンネルと他の商品とに共通な「対象性」として表現しなければならない。課題はすでに解決されている。(65~66ページ)

最後に、「課題はすでに解決されている」とマルクスが書いたのは、私はこの課題をここですでに解決している という意味でもないし、私にとって または私によって すでに解決されている と述べているのでもない。リンネルを他の商品と交換しようとしているその人(つまりはこの社会の人びと)にとって、この課題はすでに解決されているのだ、と述べているのである。

上掲の引用文を読んで、マルクスはここで矛盾を犯している。あるいはトートロジーを述べている と批判する人がいるかもしれない。または他方で、これをマルクス自身の論理とその展開だと受け取って、彼が矛盾やトートロジーを述べるはずはない、彼の頭の中ではどうなっているのか と必死に追跡する人もいるであろう。しかし、双方とも見当違いである。ここに矛盾やトートロジーが語られているとすれば、それは、この交換関係のうちに幽霊のような対象性とその現象形態を見てとる、この社会の人びと自身の矛盾やトートロジーなのである。彼は彼独特のディアレクティークを通して、それを顕わにしてみせているのだ。

だから彼は次のように述べる。

リンネルの価値関係のなかで上着がリンネルと質的に等しいもの、同じ性質のものとして認められるのは、上着が価値だからである。それだから、上着はここでは、価値がそれにおいて現われる物、または手でつかめるその現物形態で価値を表わしている物として認められているのである。ところで、上着は、上着商品の身体は、たしかに一つの単なる使用価値である。上着が価値を表わしてはいないことは、有り合わせのリンネルの一片が価値を表わしていないのと同じこと

である。このことは、ただ上着がリンネルとの価値関係のなかではそのそとでよりもより多くを意味しているということを示しているだけである。ちょうど、多くの人間は金モールのついた上着のなかではそのそとでよりもより多くを意味しているように。

上着の生産では、実際に、裁縫という形態で、人間の労働力が支出された。だから、上着のなかには人間労働が積もっている。この面から見れば、上着は「価値の担い手」である。といっても、このような上着の属性そのものは、上着のどんなにすり切れたところからも透いて見えるわけではないが。そして、リンネルの価値関係のなかでは、上着はただこの面だけから、したがってただ具体化された価値としてのみ、価値体としてのみ、認められるのである。ボタンまでかけた上着の現身<sup>うつしみ</sup>にもかかわらず、リンネルは上着のうちに同族の美しい価値魂を見たのである。とはいえ、リンネルにたいして上着が価値を表わすということは、同時にリンネルにとって価値が上着という形態をとることなしには、できないことである。たとえば、個人Aが個人Bにたいして王位にたいする態度をとるということは、同時にAにとっては王位がBの姿をとり、したがって顔つきや髪の毛やその他なお多くのものを国王が替わることに取り替えることなしには、できないのである。

こうして、上着がリンネルの等価物となっている価値関係のなかでは、上着形態は価値形態として認められる。それだから、商品リンネルの価値が商品上着の身体で表わされ、一商品の価値が他の商品の使用価値で表わされるのである。使用価値としてはリンネルは上着とは感覚的に違った物であるが、価値としてはそれは「上着に等しいもの」であり、したがって上着に見えるのである。このようにして、リンネルは自分の現物形態とは違った価値形態を受け取る。

(66ページ)

この引用文の最初の段落に、私が補足(蛇足)を付け加えると、次のようになる。

リンネルの価値関係のなかで上着がリンネルと質的に等しいもの、同じ性質のものとして認められる(認めるのは上着と交換しようとするリンネルの所持者である)のは、上着が価値である(リンネルの所持者の目には)からである。それだから、(彼の目には)上着はここでは、価値がそれにおいて現われる物、または手でつかめるその現物形態で価値を表わしている物として認められるのである。ところで(とマルクスは問いかける)上着は、上着商品の身体は、たしかに一つの単なる使用価値である。上着が価値を表わしていないことは、有り合わせのリンネルの一片が価値を表わしていないのと同じことである(なのにどうして、彼にはこのように見えるのか)。(そしてマルクスは次のように結論づける)このことは、(要するに彼 リンネルの所持者 には)ただ上着がリンネルとの価値関係のなかではそのそとで(上着がリンネルとは無関係に彼の目の前に存在するとき)よりもより多くのことを意味しているということを示しているだけである。ちょうど、多くの人間は金モールのついた上着のなかでは(それを着て部下や誰かと交わり関係しているときは)そのそとで(自宅でパジャマ姿でくつろいでいるとき)よりもより多くを意味しているように ( )

内はいずれも丹野の補足。

引用文の第2・第3段落も、同様のスタイルの文章である。これ以上の補足・蛇足はもう必要なくなる。

そして、彼はこのような分析を基にして、次のように総括する。

要するに、さきに商品価値の分析がわれわれに語ったいっさいのことを、いまやリンネルが別の商品、上着と交わりを結ぶやいなや、リンネル自身（リンネルの所持者自身、つまりこの社会の人びと自身：丹野）が語るのである。ただ、リンネルは自分の思想（リンネル所持者の、つまりはこの社会の人びとの思想：丹野）をリンネルだけ（この社会の人びとだけ）に通ずる言葉で、つまり商品語（商品世界の人びとの言語：丹野）で言い表わすだけである。労働は人間労働という抽象的的属性においてリンネル自身の価値を形成するということを言うために、リンネル（この社会の人びと：丹野）は、上着がリンネルに等しいとされるかぎり、つまり価値であるかぎり、上着はリンネルと同じ労働から成っている、と言うのである。自分の高尚な価値対象性が自分のごわごわした肉体とは違っているということを言うために、リンネル（同上：丹野）は、価値は上着に見え、したがってリンネル自身も価値物としては上着にそっくりそのままである、と言うのである。ついでに言えば、商品語もまたヘブライ語のほかになお多くの、もっと正確な、またはもっと不正確な方言をもっている。たとえば、ドイツ語の“Wertsein”〔値する〕は、商品Bの商品Aとの等置が商品A自身の価値表現であることを言い表わすには、ロマン語の動詞 *valere, valer, valoir* よりも適切ではない。Paris vaut bien une messe!〔パリはたしかにミサに値する!〕(66~67ページ)

マルクスはこれよりもいくつかまえのパラグラフから、比喩を付け加えながら叙述しているが、このパラグラフでの彼の文章は、比喩というよりもむしろ擲喩、あるいは冗談とも皮肉ともとれそうな文体になっている。もちろん、この社会の人びとやディアレクティックの相手の経済学者たちに向かっての冗談か擲喩か皮肉である。そして「a 相対的価値形態の内実」を以下のようにしめくくる。

こうして、価値関係の媒介によって、商品Bの現物形態は商品Aの価値形態になる。言い換えれば、商品Bの身体は商品Aの価値鏡になる。商品Aが、価値体としての、人間労働の物質化としての商品Bに関係することによって、商品Aは使用価値Bを自分自身の価値表現の材料にする。商品Aの価値は、このように商品Bの使用価値で表現されて、相対的価値の形態をもつのである。(67ページ)

## b 相対的価値形態の量的規定性

その価値が表現されるべき商品は、それぞれ与えられた量の使用対象であって、15シェッフエルの小麦とか100ポンドのコーヒーとかいうものである。この与えられた商品量は一定量の人間労働を含んでいる。だから、価値形態は、ただ価値一般だけではなく、量的に規定された価値すなわち価値量をも表現しなければならない。それゆえ、商品Aの商品Bにたいする価値関係、リンネルの上着にたいする価値関係のなかでは、上着という商品種類がただ価値体一般としてリンネルに質的に等置されるだけではなく、一定のリンネル量、たとえば20エレのリンネルに、一定量の価値体または等価物、たとえば1着の上着が等置されるのである。

「20エレのリンネル = 1着の上着 または20エレのリンネルは1着の上着に値する」という等式は、1着の上着に、20エレのリンネルに含まれているのとちょうど同じ量の価値実体が含まれているということ、したがって両方の商品量に等量の労働または等しい労働時間が費やされているということを前提する。しかし、20エレのリンネルまたは1着の上着の生産に必要な労働時間は、織布または裁縫の生産力の変動につれて変動する。そこで次にはこのような変動が価値量の相対的表現に及ぼす影響をもっと詳しく研究しなければならない。(67~68ページ)

これはこのサブセクションの冒頭の2パラグラフである。このうちの、最後の2つの文章はマルクス自身の文章だが、それ以外は、これまで分析しながら整理してきた経済学の論理のもとでは、次のステップはどうなるかが述べられているだけである。まさに経済学は、そして20エレのリンネルを1着の上着と交換する人も半ば無意識に、「……したがって、両方の商品量に等量の労働または等しい労働時間が費やされているということを前提する」(傍点は丹野)。

「しかし、20エレのリンネルまたは1着の上着の生産に必要な労働時間は、織布または裁縫の生産力の変動につれて変動する」ことも、当時の経済学者たちはすでに気づいていた。実際に織布や裁縫などなどの有用労働にたずさわる人びとの個別の労働能力には個人差があるが、マルクスは59ページにその理由も述べていたように、ここではいろいろな労働種類の労働力を、個人差を平均した単純労働力とみなしている。上記の「変動」はそのうえでのことである。そこで彼は、「次にはこのような変動が価値量の相対的表現に及ぼす影響をもっと詳しく研究し」てみようと言って、このあと、4つの場合に分けてその「影響」を調べている。以下はその結果判明したことの要約である。

こういうわけで、価値量の現実の変動は、価値量の相対的表現または相対的価値の大きさには、明確にも完全に反映しないのである。一商品の相対的価値は、その商品の価値が不変のままでも変動することがありうる。その商品の相対的価値は、その商品の価値が変動しても、不変のままでありうる。そして最後に、その商品の価値量とこの価値量の相対的表現とに同時に生ずる変動が互いに一致する必要は少しもないのである。(69ページ)



ここでは価値量とともに価値という言葉も用いられているが、マルクスが68ページに注記しているように、ここでの価値は価値量という意味で用いられている。また、「価値量の相対的表現または相対的価値の大きさ」あるいは、「一商品の相対的価値」というのは、「商品Aの相対的価値、すなわち商品Bで表わされた商品Aの価値」(68ページ)という意味であり、ここでも価値は価値量のことである。

20エレのリンネル = 1着の上着、つまり20エレのリンネルを1着の上着と交換する、という場合、双方の商品量に等量の労働つまり等しい労働時間が費やされている、ということが経済学の前提であった。そうでなければどちらかの商品所持者が損をすることになり、交換は成立しないことになる。ただし、一方または双方の労働の生産力は、さまざまな要因で変動する。しかも、交換に付されるリンネルも上着も、そのある部分は古い設備のもとで生産力の低い状況下で生産されたものであり、他の部分は新たな設備と高い生産力のもとで生産されたものであり、それらさまざまなリンネルと上着 　ただし見た目にはそれらがどのような状況下で生産されたのかはわからない　の所持者たちが、互いに入り交じっている。このように変動しかつ混交している状況のなかのある時点で、ある人がx量のリンネルを別の人のy量の上着と交換しようとする。xとyの正当な比率、すなわち双方の商品量に等しい労働時間が費やされているか否かを、交換の時点で確かめるすべはあるか？ 本書で考察の対象にしている社会は資本主義的生産様式が支配的に行われている社会であるが、ここまでの段階では、それ以前の社会でもかまわない。要は生産物の一部分なりかなりの部分が交換を通して流通する社会である。ただし計画経済下の社会ではないし、マルクス以後に誕生し、その後崩壊した社会主義国家でもない。要するに上記の交換の前提は、それぞれの交換の時点では確かめようのない前提なのだ、とマルクスは言うのである。損したか得をしたかそれともまあまあであったかは、事後的にならわかるかもしれないが、だからといってそれは次の交換時の保証にはならない。同種の交換が多数の人びとの間でたくさん行なわれていれば、そこに平均値としての相場が見えてこようが、これまた事後的なものであり、相場自体も変動することになる。

## 復習

「3 等価形態」に進むまえに、これまでのところをここで復習しておこう。

マルクスは、第一節で商品の二つの要因、使用価値と交換価値についての経済学的説明を分析し、「使用価値は、富の社会的形態がどんなものであるかにかかわらず、富の素材的な内容をなしている。われわれが考察しようとする社会的形態にあつては、それは同時に素材的な担い手になっている　交換価値の」(50ページ：傍点は丹野)ことを見出だした。さらに交換価値なるものの考察を進め、「およそ交換価値は、ただ、それとは区別される或る実質の表現様式、『現象形態』でしかありえない、ということになる」(51ページ)のであって、「これらの労働生産物に残っているもの

.....は、同じまぼろしのような対象性のほかにはなにもなく、無差別な人間労働の、すなわちその支出の形態にはかかわりのない人間労働力の支出の、ただの凝固物のほかにはなにもない。これらの物が表わしているのは、ただその生産に人間労働力が支出されており、人間労働が積み上げられているということだけである。このようなそれらに共通な社会的（つまり超自然的な：丹野）実体の結晶として、これらのものは価値 商品価値なのである」（52ページ）ことを洞察した。

さらに彼は、経済学者は商品の価値の大きさをどのようにして計るのかと問い、彼らの答えを突き詰めると、「だから、ある使用価値の価値量を規定するものは、ただ、社会的に必要な労働の量、すなわち、その使用価値の生産に社会的に必要な労働時間だけである」（54ページ）こと、しかも、「一商品の価値の大きさは、その商品に実現される（社会的に必要な：丹野）労働の量に正比例し、その労働の生産力に反比例して変動する」（55ページ）ようなものであること、を論証してみせた。そして彼は、第二節の冒頭で、以下のように読者の注意を促した。

最初から商品はわれわれにたいして二面的なものとして、使用価値および交換価値地として、現われた。次には、労働も、それが価値に表わされているかぎりでは、もはや、使用価値の生みの母としてのそれに属するような特徴をもってはいないということが示された。このような、商品に含まれている労働の二面的な性質は、私をはじめ批判的に指摘したものである。この点は、経済学の理解にとって決定的な跳躍点であるから、ここでもっと詳しく説明しておかなければならない。（56ページ）

このなかの「このような、商品に含まれている労働の二面的な性質」というのは、いかなる社会の人びとにとっても存在する性質なのではない。「われわれが考察しようとする社会形態」に暮らす人びと、つまり互いの品物を商品として交換を通してやりとりする社会の人びとが、商品のうちに含まれていると考える 一方は使用価値の生みの母としてその品物それ自体に属する特徴、他方は人びとが無意識に担わせている「まぼろしのような属性」という 労働の二面的性質のことである。しかもこの社会の人びとも経済学者たちも、このことを混同して考えており、だから経済学の論理は変てこなことになる。それゆえ彼は、「このような、商品に含まれている労働の二面的な性質は、私をはじめ批判的に指摘したものである。この点は、経済学の理解にとって決定的な跳躍点であるから、ここでもっと詳しく説明しておかなければならない」と言ったのだった。

その説明ののち、彼は第三節の冒頭で、ここまでの分析結果を次のように要約した。

商品（われわれが考察している社会の人びとが商品として交換する品物：丹野）は、使用価値または商品体の形態をとって、鉄やリンネルや小奏などとして、この世に生まれてくる。これが商品のありのままの現物形態である。だが、それらが（彼らにとって：丹野）商品であるのは、ただ、それらが二重なものであり、使用対象であると同時に価値の担い手であるからである。そ

それゆえ、商品は、ただそれが二重形態、すなわち現物形態と価値形態とをもつかぎりでのみ、商品として現われるのであり、言い換えれば商品という形態をもつのである。(62ページ)

ただし、たとえばリンネルという商品は、それがリンネルであることを身をもって示しているが、それが同時に価値でもあるということ、自分自身の姿かたちでもって表わすことはけっしてできない。にもかかわらず、このリンネル(の所持者)は、それ自身が価値なのだと主張する。それならば、おまえが価値であるというところのその価値の姿かたちを、われわれの目に見え手で触れられる姿かたち(形態)でもって示してみろ!、ということになる。リンネル(の所持者)は、どのようにしてその価値の姿かたちを示すことになるか。これが、第三節での分析と考察の課題である。そして彼は、その分析の端緒が、それまでの分析から判明した以下のような結論のうちに見いだせる、と言う。

商品体の感覚的に粗雑な(手触り確かな)対象性とは正反対に、商品の価値対象性には一分子も自然素材ははいっていない。それゆえ、ある一つの商品をどんなにいじりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまえようがないのである。とはいえ、諸商品は、ただ、それらが人間労働という同じ社会的な単位(抽象的人間労働というこの社会において社会的に同一のもの)の諸表現であるかぎりでのみ価値対象性をもっているのだということ、したがって商品の価値対象性は純粋に社会的であるということ、価値対象性は商品と商品との社会的な関係(つまり交換関係)のうちにはしか現われえないということもまたおのずから明らかである。われわれも、じっさい、諸商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている価値を追跡したのである。いま、われわれは再び価値のこの現象形態に帰らなければならない。(62ページ:カッコ内は丹野)

さらにマルクスは、この第三節の検討課題として上記の課題のみでなく、以下のような課題をも設定する。

諸商品は、それらの使用価値の雑多な現物形態とは著しい対照をなしている一つの共通な価値形態 貨幣形態をもっているということだけは、だれでも、ほかのことはなにも知ってなくても、よく知っていることである。しかし、いまここでなされなければならないことは、ブルジョア経済学によってただ試みられたことさえないこと、すなわち、この貨幣形態の生成を示すことであり、したがって、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な最も目立たない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡することである。これによって同時に貨幣のなぞも消え去るのである。(62ページ)

そして彼は、後者の課題を分析するための基礎であり、前者の課題の最もシンプルな検討対象として、「A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態」をとりあげた。

最も単純な価値関係は、明らかに、なんであろうとただ一つの異種の商品にたいするある一つの商品の価値関係である。それゆえ、二つの商品の価値関係は、一商品のための最も単純な価値表現を与えるのである。

x 量の商品 A = y 量の商品 B または x 量の商品 A は y 量の商品 B に値する。

(20エレのリンネル = 1 着の上着、または20エレのリンネルは 1 着の上着に値する。)

すべての価値形態の秘密は、この単純な価値形態のうちにひそんでいる。それゆえ、この価値形態の分析には固有な困難がある。(62~63ページ)

彼はまえもってこのように注意を促したうえで、この単純な価値形態の徹底的な顕微解剖にとりかかった。ここでの彼自身の分析、この社会の人びととその代表としての経済学者とのディアレクティークを通しての分析検討について、彼は本書の「第一版序文」のなかでも以下のように読者に注意を促していた。

なにごとにも初めが困難だということは、どの科学の場合にも言えることである。それゆえ、第一章(第二版以降での第一篇)ことに商品の分析を含む節(第二版以降での第一章)の理解は、最大の困難となるであろう。ここでもっと詳しく、価値実体と価値量との分析について言えば、私はこの分析をできるだけ平易なものにした。貨幣形態をその完成した姿とする価値形態は、非常に無内容で簡単である。それにもかかわらず、人間精神は二千年以上もまえ(のアリストテレス)から空しくその解明に努めてきたのであり、しかも他方では、これよりもずっと内容の豊富な複雑な諸形態の分析に、少なくとももだいたいのところまでは、成功したのである。なぜだろうか? 成育した身体は身体細胞よりも研究しやすいからである。そのうえ、経済的諸形態の分析では、顕微鏡も化学試薬も役にはたさない。抽象力がこの両方の代わりをしなければならぬ。ところが、ブルジョア社会にとっては、労働生産物の商品形態または商品の価値形態が経済的細胞形態なのである。教養のないものには、この形態の分析は、ただあれこれと細事のせんさくをやっているだけのように見える。じっさい、そこでは細事のせんさくを事とするにはちがいない。しかし、それは、ちょうど、顕微解剖でそのようなせんさくがなされるのと同じことなのである。

それゆえ、この価値形態に関する一節(つまり第二版以降での第一章部分)を別とすれば、本書を難解だと言って非難することはできないであろう。もちろん、私が予想している読者は、なにか新しいことを学ぼうとし、したがってまた自分自身で考えようとする人びとなのである。

(11~12ページ: カッコ内および傍点は丹野)

そして、これまでの復習でも確認したように、x量の商品A（20エレのリンネル）は、自分自身の現物形態では自分が価値であることをけっして表現することができないのであった。この社会の人びとは、この不可能事・矛盾をどうやってくぐり抜け、表現しているか？ そのマルクス自身による解読結果が、Aの「1 価値表現の両極 相対的価値形態と等価形態」および「2 相対的価値形態」の「a 相対的価値形態の内実」と「b 相対的価値形態の量的規定性」において示されたのだ。われわれは、彼が展開するディアレクティークと、それを通して彼が顕微解剖し分析してみせたプロセスを、ここまで追跡してきた。そこでの肝心な要点は「ここでは二つの異種の商品AとB、われわれの例ではリンネルと上着は、明らかに二つの違った役割を演じている。リンネルは自分の価値を上着で表わしており、上着はこの価値表現の材料として役だっている。第一の商品は能動的な、第二の商品は受動的な役割を演じている。第一の商品の価値は相対的価値として表わされる。言いかえれば、その商品は相対的価値形態にある。第二の商品は等価物として機能している。言いかえれば、その商品は等価形態にある」（63ページ）ということであった。われわれは、「価値表現の両極」のもう一方の極である「等価形態」についての彼の顕微解剖的分析を、以下で追跡してみよう。

### 3 等価形態

すでに見たように、一商品A（リンネル）は、その価値を異種の一商品B（上着）の使用価値で表わすことによって、商品Bそのものに、一つの独特な価値形態、等価物という価値形態を押しつける。（70ページ）

商品Bに等価物という一つの独特な価値形態を押しつけるのは、商品に交換価値を担わせたと同様に、商品Bと交換しようとする商品Aであり、つまりは商品Aの所持者である。そうすることによって、

リンネル商品はそれ自身の価値存在（つまり おれは価値なのだ ということ：丹野）を顕わにしてくるのであるが、それは、上着がその物体形態とは違った価値形態をとることなしにリンネル商品に等しいとされることによってである。（同上）

なぜ、どうしてこんなことになるか？ おれは価値なのだ と主張するリンネルでさえも自分自身の生身ではそれを表現できなかったように、上着もまた自分自身が価値であることを自分で示せるはずがない。ましてや、他人であるリンネルの価値を身代わりとして表現せよと言われても、上着の方は化けようがない。ただ、リンネル（の所持者）の要請に従って、上着はリンネルの面前

に、生まれ育った生身の姿かたちのままで立ちすくむ。するとリンネルは、私とおまえは生まれ育ちも姿かたちも違うけれど、にもかかわらず、私とおまえは実は本当は同じなんだよ、たまたま見た目に違う姿かたちをとっているだけなんだよ」と、「リンネルは自分の思想をリンネルだけに通じる言葉で、つまり商品語で言い表わす」(66ページ)のである。というわけで、

だから、リンネルは実際にそれ自身の価値存在を、上着が直接にリンネルと交換されうるものだということによって、表現するのである。したがって、一商品の等価形態は、その商品の他の商品との直接的交換可能性の形態である。(70ページ)

ということになる。だがしかし、ことは簡単ではない。

ある一つの商品種類、たとえば上着が、別の商品種類、たとえばリンネルのために、等価物として役立ち、したがってリンネルと直接に交換されうる形態にあるという独特な属性を受け取るとしても、それによっては、上着とリンネルとが交換されうる割合はけっして与えられてはいない。(同上)

この割合はどうやって定まるのかね？ とマルクスはこの社会の人びとつまり経済学者にたずねる。その答えはこうである。

この割合は、リンネルの価値量は与えられている(リンネルを織った私・われわれ・その代理人たる経済学者としての私たちにはわかっている：丹野)のだから、上着の価値量によって定まる。(同上)

そこでマルクスは、ちょっと待ってくださいよ。あなたにはリンネルの価値量がわかっているだろうけど、他の人にはわからないんだよ。あなたの相手である上着の所持者だって、あなたと同様に、上着の価値量は与えられているのだから、この割合はリンネルの価値量によって定まる、と言いまっせ、と冷やかすのである。

上着が等価物として表現され、リンネルが相対的価値として表現されていようと、または逆にリンネルが等価物として表現され、上着が相対的価値として表現されていようと、上着の価値量は、相変わらず、その生産に必要な労働時間によって、したがって上着の価値形態にはかわりなく、規定されている。しかし、商品種類上着が価値表現において等価物の位置を占めるならば、この商品価値の価値量は価値量としての表現を与えられてはいない。この商品種類は価値等式のなかではむしろただ或る物の一定量として現われるだけである。

たとえば、40エレのリンネルは「値する」 なにに？ 2着の上着に。商品種類上着がここでは等価物の役割を演じ、使用価値上着がリンネルにたいして価値体として認められているので、一定量の上着はまた一定の価値量リンネルを表現するに足りるのである。したがって、2着の上着は40エレのリンネルの価値量を表現することはできるが、しかしそれはそれ自身の価値量、上着の価値量を表現することはけっしてできないのである。価値等式における等価物は、つねに、ただ、ある物の、ある使用価値の、単純な量の形態を持っているだけだというこの事実の皮相な理解は、ペーリをもその多くの先行者や後続者をも惑わして、価値表現のうちに単なる量的な関係を見るに至らせたのである。そうではなく、一商品の等価形態はけっして量的な価値規定を含んではいないのである。(70ページ)

そして彼は、以下のことを最初に指摘する。それは等価形態の考察で明白になった三つの奇妙さのなかの一つである。

等価形態の考察にさいして目につく第一の特色 (Eigentümlichkeit、奇妙さ：丹野) は、使用価値がその反対物の、価値の、現象形態になるということである。(同上)

経済学の発端の前提から出発して、その論理をつぶさに追跡してきてみたら、いかに奇妙な結論にわれわれは導かれてしまったか、しかもこれは経済学の論理が内包している奇妙さなのだ、とマルクスは(言外に)述べているのである。

彼は、等価形態の第一の奇妙さについてさらに詳しく説明する。

商品の現物形態が価値形態になるのである。だが、よく注意せよ。この取り替え[Quidproquo]が一商品B(上着や小麦や鉄など)にとって起きるのは、ただ任意の他の一商品A(リンネルなど)が商品Bにたいしてとる価値関係のなかだけでのことであり、ただこの関係のなかだけでのことである。どんな商品も、等価物としての自分自身に関係することはできないのであり、したがってまた、自分自身の現物の皮を自分自身の価値の表現にすることはできないのだから、商品は他の商品を等価物としてそれに関係しなければならないのである。すなわち、他の商品の現物の皮を自分自身の価値形態にしなければならないのである。(71ページ)

「このことをわかりやすくする」ために、彼はある量のある品物(ここでは棒砂糖)の重量を計るという例をとりあげる。天秤の左の皿にこの品物を乗せ、右の皿にその重量があらかじめ確定されているいろいろな鉄片を乗せて計量する。「この関係のなかでは、鉄は、重さ以外のなにものをも表わしていない物体とみなされる」ので、「種々の鉄量は重量尺度として役だ」つ。そして彼は次のように述べる。

鉄体が重量尺度としては棒砂糖にたいしてただ重さだけを代表しているように、われわれの価値表現では上着体はリンネルにたいしてただ価値だけを代表している。

とはいえ、類似はここまでである。鉄は、棒砂糖の重量表現では、両方の物体に共通な自然属性、それらの重さを代表している、ところが、上着は、リンネルの価値表現では、両方の物の超自然的な属性、すなわちそれらの価値、純粋に社会的な或るものを代表しているのである。  
(同上)

彼はさらに次のように解釈作業を進める。

ある一つの商品、たとえばリンネルの相対的価値形態は、リンネルの価値存在を、リンネルの身体やその諸属性とはまったく違ったものとして、たとえば上着に等しいものとして表現するのだから、この表現そのものは、それが或る社会的関係を包蔵していることを暗示している。  
(同上)

これは、ここまでで何回も確認してきたことである。つまり、20エルのリンネルは自分自身が20エルのリンネルという使用価値であることを我が身で示すが、それが一定量の価値なのだというその姿かたちは、自分自身単独では表現できない。そこでリンネルは自分が価値なのだということを、「リンネルの身体やその諸属性とはまったく違ったものとして、たとえば上着に等しいものとして表現するのだから、この表現そのものは、それが或る社会的関係を包蔵していることを暗示している」。

等価形態については逆である。等価形態は、ある商品体、たとえば上着が、このあるがままの姿の物が、価値を表現しており、したがって生まれながらに価値形態をもっているということ、まさにこのことによって成り立っている。いかにも、このことは、ただリンネル商品が等価物としての上着商品に関係している価値関係（すなわち交換関係：丹野）のなかで認められているだけである。（71～72ページ）

つまり、リンネル（の所持者）は自分単独では不可能なことを、上着と関係することによって、次のような芸当をやっけてのける。私リンネルは価値でもある。私の価値の姿かたちは私の生身を見ても見えないだろうが、いま私が握手している上着を見よ。彼はただの上着ではない。実は彼は価値そのものなのであって、だから私の価値を映し出す鏡なのだ というわけである。ただし、こんな不可解なことが成り立つのは、上着がリンネルの交換相手としてその前に立たされているという状況にあるときだけのことであって、上着が単独で存在するときには、まさに上着そのものにす



ぎない。

上掲の引用文に続く文章は、訳者が文脈を正確にたどりきれずに訳しているため、読むわれわれにもマルクスがここで述べている論理が正確にたどれない。まず訳文をそのまま以下に引用する。

しかし、ある物の諸属性は、その物の他の諸物にたいする関係から生ずるのではなく、むしろこのような関係のなかではただ実証されるだけなのだから、上着もまた、その等価形態を、直接的交換可能性というその属性を、重さがあるとか保温に役だつとかいう属性と同様に、生まれながらもっているように見える。それだからこそ、等価形態の不可解さが感ぜられるのであるが、この不可解さは、この形態が完成されて貨幣となって経済学者の前に現われるとき、はじめて彼のブルジョア的に粗雑な目を驚かせるのである。そのとき、彼はなんとかして金銀の神秘的な性格を説明しようとして、金銀の代わりにもっとまぶしくないいろいろな商品を持ち出し、かつて商品等価物の役割を演じたことのあるいっさいの商品賤民の目録を繰り返しこみあげてくる満足をもって読みあげるのである。彼は、20エレのリンネル = 1着の上着 というような最も単純な価値表現がすでに等価形態の謎を解かせるものだということには、気がつかないのである。  
(72ページ)

この文章の直前に述べられたことは、等価形態という極に立たされた上着は、生身のままで価値を表現している物、つまり現物そのまま価値形態（価値の姿かたち）になる、という奇妙なことになる；ただし、こんな奇妙なことは、リンネルとの交換関係つまり価値関係のなかでだけ生じることであって、上着自体の自然の属性ではない、ということであった。これに続けて上の文章の脈絡をたどってみる。

しかし、（一般に）ある物の諸属性は、（そのもの自体に備わっている諸属性なのであって）その物の他の諸物にたいする関係から生ずるのではない。むしろこのような関係（ある物が別のある物となんらかの関係のなかにおかれる さきの例では天秤の双方の皿に乗せられた棒砂糖と鉄片）のなかでは、当の物が確かにこれこれの属性をもつことが実証されるだけである。だから、（この社会の人びとには）上着もまた、その等価形態を、直接的交換可能性というその属性を、重さがあるとか保温に役だつとかいう属性と同様に、生まれながらもっているように見えてしまうのである。（このような事情）だからこそ、このような等価形態が完成されて貨幣となって経済学者の前に現われると、そのときはじめて、こうした等価形態の不可解さは、彼のブルジョア的な粗雑な目を驚かせるのだ。そこで彼は、なんとかして金銀の神秘的な性格を説明しようとして、……。

マルクスによれば、当時の経済学者たちは金銀の神秘的な性質を説明しようとして、「金銀の代わりにもっとまぶしくないいろいろな商品を持ち出し、かつて商品等価物の役割を演じたことのあるいっさいの商品賤民の目録を繰り返しこみあげてくる満足をもって読みあげるのである。」

ここでマルクスが間接的にまたは言外に言っているのは、以下のようなことである。経済学が誕

生し成長してきた時代には、すでに金銀による貨幣が交換手段として定着していた。なぜ、ある分量の金や銀がある一定量の諸物の価値を表現することができるのか？ 経済学者はこの説明を迫られた。彼らには金や銀という特定の物質のみが備えている自然の属性の一つとして、このような直接的交換可能性という属性をもっているとは思えなかった。そして歴史をさかのぼれば、さまざまな時代と地域で、さまざまな品物が交換手段として用いられていた。彼らはそれらを原始貨幣と位置づけた。さらには、古くはまたは片田舎では、直接の物々交換も行われていたことも知っていた。そこから彼らは、 $x$  量の商品 A =  $y$  量の商品 B という等式は何を表現しているのかを問い、ついに、左辺と右辺双方の品物の中に、等量の労働が含まれていること、だからこそ人びとは交換する。逆に言えば、一方または双方が交換を拒否するのは、それらを生産する際に込められた労働の量が等しくない、と判断したからだ、と経済学者は考えた。だから、本来は金銀のみでなく、さまざまな人間労働の産物のどれでも互いに等価物の役割を演じていたのである。その意味では、相手の商品の価値の表現可能性、つまり直接的交換可能性という属性は、金銀に固有の属性ではなく、労働の産物一般に備わっている自然の属性なのだ。ただ、種々の事情が重なって、今日では金銀にその役割が集中するに至ったのだ。経済学者たちは「繰り返しこみあげてくる満足をもって」そう考えた。だが、彼らは第二節で詳述した「商品に表わされる労働の二重性」に気づかず、それを混同したままで商品の価値形態を考察していた。だから、彼らは等価形態が謎を秘めていること自体に気づけなかったし、上述した等価形態の第一の奇妙さにも、このあと指摘する第二・第三の奇妙さにも、まったく気づくことができなかつたのだ。「彼は、20エレのリンネル = 1 着の上着 というような最も単純な価値表現がすでに等価形態の謎を解かせるものだということには、気がつかないのである」。

そこで彼は、第二節の要約をここで再び次のように語る。

等価物として役だつ商品の身体は、つねに抽象的人間労働の具体化として認められ、しかもつねに一定の有用な具体的労働の生産物である。つまり、この具体的な労働が抽象的人間労働の表現になるのである。たとえば上着が抽象的人間労働の単なる実現として認められるならば、実際に上着に実現される裁縫は抽象的人間労働の単なる実現形態として認められるのである。リンネルの価値表現では、裁縫の有用性は、それが衣服をつくり、したがって人品をもつくるということにあるのではなく、それ自身が価値であると見られるような物体、つまりリンネル価値に対象化されている労働と少しも区別されない労働の凝固であると見られるような物体をつくることにあるのである。このような価値鏡をつくるためには、裁縫そのものは、人間労働であるというその抽象的属性のほかにはなにも反映してはならないのである。(72ページ)

そして彼は、次のパラグラフで以下のように指摘する。

裁縫の形態でも織布の形態でも、人間の労働力が支出される。それだから、どちらも人間労働という一般的な属性をもっているものであり、また、それだから、一定の場合には、たとえば価値生産の場合には、どちらもただこの観点のもとでのみ考察されうるのである。こういうことは、なにも神秘的なことではない。(同上：傍点は丹野)

共同体の人びとが彼らの生活に必要なさまざまな品物を、それぞれに手分けして分業生産し、それらを交換を介さずに共にする (to share) 場合、彼らが手分けして行なうさまざまな種類の仕事には各人の労働力が支出され、どの労働にしても人間労働という一般的な属性をもっている。この共同体の人びと自身もこのように考える。別の場合、われわれが考察している社会の人びとが、商品として交換するために各自それぞれの品物を私的に生産している場合、あるいはある商品を生産している工場で多数の労働者がさまざまな部品生産や組立てや運搬などの分業を行なっている場合、いずれの場合もやはり同様に上述のような観点のもとで考察される。だから、「こういうことは、なにも神秘的なことではない」。

ところが、商品の価値表現では、事柄がねじ曲げられてしまうのである。たとえば、織布はその織布としての具体的形態においてではなく人間労働としての一般的な属性においてリンネル価値を形成するのだということを表示するためには、織布にたいして、裁縫が、すなわちリンネルの等価物を生産する具体的労働が、抽象的人間労働の手でつかめる実現形態として対置されるのである。

だから、具体的労働がその反対物である抽象的人間労働の現象形態になるということは、等価形態の第二の特色 (Eigentümlichkeit ; 奇妙さ) なのである。(72~73ページ：傍点およびカッコ内は丹野)

彼はつづけて第三の奇妙さを指摘する。

しかし、この具体的労働、裁縫が、無差別な人間労働の単なる表現として認められるということによって、それは、他の労働との、すなわちリンネルに含まれている労働との、同等性の形態をもつのであり、したがってまた、それは、すべての他の商品生産労働と同じに私的労働でありながら、しかもなお直接に社会的な形態にある労働なのである。それだからこそ、この労働は、他の商品と直接に交換されうる生産物となって現われるのである。だから、私的労働がその反対物の形態すなわち直接に社会的な形態にある労働になるということは、等価形態の第三の特色 (奇妙さ：丹野) である。(73ページ)

ある商品の価値表現において等価形態が秘めている謎、不可解さ、奇妙さを、マルクスは以上の

ように解き明かした。経済学者たちはこのような不可解さ自体に気づかないままに価値論を展開している。しかし、はるか昔に、この不可解さに気づいていた人がいた。マルクスはそう言う。

最後に展開された等価形態の二つの特色（奇妙さ、不可解さ：丹野）は、価値形態を他の多くの思考形態や社会形態や自然形態とともに はじめて分析したあの偉大な探求者にさかのぼってみれば、もっと理解しやすいものになる。その人は、アリストテレスである。

アリストテレスがまず第一に明言しているのは、商品の貨幣形態は、ただ、単純な価値形態のいっそう発展した姿、すなわちある商品の価値を任意の他の一商品で表現したもののいっそう発展した姿でしかないということである。というのは、彼は次のように言っているからである。

「5台の寝台 = 1軒の家」

というのは、

「5台の寝台 = これこれの額の貨幣」

というのと「違わない」と。

彼は、さらに、この価値表現がひそんでいる価値関係はまた、家が寝台に質的に等置されることを条件とするということ、そして、これらの感覚的に違った諸物は、このような本質の同等性なしには、通約可能な量として互いに関係することはできないであろうということを見ぬいている。彼は言う、「交換は同等性なしにはありえないが、同等性はまた通約可能性なしにはありえない」と。ところが、ここでにわかには彼は立ちどまって、価値形態のそれ以上の分析をやめてしまう。「しかしこのように種類の違う諸物が通約可能だということ」、すなわち、質的に等しいということは、「ほんとうは不可能なのだ」と。このような等置は、ただ、諸物の真の性質には無縁なものでしかありえない、つまり、ただ「実際上の必要のための応急手段」でしかありえない、というのである。（73～74ページ）

このあとのパラグラフも含めて、マルクスは「あの偉大な探求者」と称えるアリストテレスの分析を中途半端だったと批判しているのではない。逆に、彼はまさに価値形態の不可解さに気づいてそのことを指摘した最初の人だったと称賛しているのである。彼は、 $x$  量の商品 A =  $y$  量の商品 B ということのうちに、これらの感覚的に違った諸物は、なにか或る同じもの 同等な本質を共に秘めていることなしには、通約可能な量として互いに関係することはできないことを見ぬいた。そして、その 或る同じもの とは何かを考察した。彼は、交換されるさまざまな品物がもつ自然の諸属性のうちに、そのような 同じもの を見いだせなかった。それゆえ彼は、このように種類の違う諸物が通約可能だということ、すなわち、質的に等しいなどということは、本当は不可能なのだ と指摘し、このような等置は、ただ、諸物の真の性質には無縁なものでしかありえない と指摘したのである。

彼のこうした洞察にもかかわらず、古代ギリシアのポリス・アテナイのマーケットでは、さまざま

まな職人や商人がさまざまな品物を持ち寄って、平気でそれらを交換しあっている。彼らは、アリストテレスには見ることができないいかなる 同じもの を見てとって、それをどのように計量して、等しいか否かを判断しているのか。彼はやはり、このような等置は、ただ、諸物の真の性質には無縁なものでしかありえず、ただ実際上の必要のための応急手段でしかありえない、と結論せざるをえなかった。

その 或る同じもの とは、マルクスがすでに解き明かしたように、各人の所有物を互いに交換を通してやりとりする人たちが諸物のなかに見てとるまぼろし 幽霊 のような対象性なのであり、すなわち、こうした人びとが、諸物に担わせているある（彼らの社会における）社会的内実なのであった。それゆえ、ポリスの市民のなかでも交換によらずに生活に必要な品物の多くを入手し、しかもそれを当然視していた人びとの一人であるアリストテレスは、このような超自然的な属性を認めるはずがなかったのである。

そのうえで、マルクスは以下のように説明を続ける。

つまり、アリストテレスは、彼のそれからさきの分析がどこで挫折したかを、すなわち、それは価値概念がなかったからだということを、自分でわれわれに語っているのである。この同等なもの、すなわち、寝台の価値表現のなかで家が寝台のために表わしている共通な実体は、なんであるか？ そのようなものは「ほんとうは存在しえないのだ」とアリストテレスは言う。なぜか？ 家が寝台にたいして或る同等なものを表わしているのは、この両方のもの、寝台と家とのうちにある現実に同等なものを、家が表わしているかぎりでのことである。そしてこの同等なものは 人間労働なのである。

しかし、商品価値の形態では、すべての労働が同等な人間労働として、したがって同等と認められるものとして実現されているということを、アリストテレスは価値形態そのものから読みとることができなかったのであって、それは、ギリシアの社会が奴隷労働を基礎とし、したがって人間やその労働力の不等性を自然的基礎としていたからである。価値表現の秘密、すなわち人間労働一般であるがゆえの、またそのかぎりでの、すべての労働の同等性および同等な妥当性は、人間の同等性の概念がすでに民衆の先入見としての強固さをもつようになったときに、はじめてその謎を解かれることができるのである。しかし、そのようなことは、商品形態が労働生産物の一般的な形態であり、したがってまた商品所有者としての人間の相互の関係が支配的な社会的関係であるような社会において、はじめて可能なのである。アリストテレスの天才は、まさに、彼が諸商品の価値表現のうちの一つの同等性関係を発見しているということのうちに、光り輝いている。ただ、彼の生きていた社会の歴史的な限界が、ではこの同等性関係は「ほんとうは」なんであるのか、を彼が見つけだすことを妨げているだけである。（74ページ）

ここでもマルクスはアリストテレスの考察を称賛しているのであって、中途半端に挫折したと

いって批判しているのではない。「価値表現の秘密」は、マルクスがここで述べているような社会に至ったときに、「はじめてその謎を解かれることができる」のであり、実際にマルクスがこれまでの分析によって解き明かした。彼は、現にこの社会の一員として生きていたが、彼はこの社会を異邦人の目で見えていたし、異邦人の目で解剖し分析した。だからこそ、彼は価値表現の謎・不可解さ・奇妙さを読み解くことができたのである。

#### 4 単純な価値形態の全体

単純な価値形態とは、「 $x$  量の商品 A =  $y$  量の商品 B または  $x$  量の商品 A は  $y$  量の商品 B に値する」というものであった。本書で考察対象としている社会の人びとは、 $x$  量の商品 A たとえば 20 エレのリンネルは、単に 20 エレのリンネルという使用価値であるだけでなく、それは価値でもあり、ある一定量の価値でもある、と考える。彼らが何を指してその商品の価値と呼び、その価値量はどのようにして計られると考えているか、それらをとことん突き詰めて分析してみるとどのような結果に至るかを、マルクスは第一節と第二節で詳述した。そして第三節の A では、この社会の人びとが言うところの  $x$  量の商品 A の価値とその量は、実際にはどんな姿かたちをとって現われるかあるいは表現されるか、を見てきた。というのは、 $x$  量の商品 A (20 エレのリンネル) は、単独の自分自身では一定量の具体的なある品物であることを示すだけで、その価値とその大きさを五感でもって確められる姿かたちとして表現することはけっしてできない。そこで、この商品は一つの異種の商品と関係を取り結ぶなかで自らの価値を表現する。といっても、この関係は双方の商品という物と物との物理・化学的關係ではなく、ある社会的な関係である。とはいえ物と物が社会的な関係をとることは不可能である。だからそれは、一方の商品の所有者と他方の商品所持者という、人と人のある社会的な関係、つまり交換関係である。

そしてここでは、二つの商品 A と B は、明らかに二つの違った役割を果たしているのであった。しかも上の等式では、一方の商品の価値だけが表現されるのであった。

ある一つの商品の単純な価値形態は、異種の一商品にたいするその商品の価値関係のうちに、すなわち異種の一商品との交換関係のうちに、含まれている。商品 A の価値は、質的には、商品 A との商品 B の直接的交換可能性によって表現される。商品 A の価値は、量的には、商品 A の与えられた量との商品 B の一定量の交換可能性によって表現される。言いかえれば、一商品の価値は、それが「交換価値」として表示されることによって独立に表現されている。(75 ページ)

また、この次の次のパラグラフでは、これまでの考察を次のように要約している。

商品 B にたいする価値関係に含まれている商品 A の価値表現のいっそう詳しい考察は、この価

値関係のなかでは商品Aの現物形態はただ使用価値の姿として、商品Bの現物形態はただ価値形態または価値の姿としてのみ認められているということを示した。つまり、商品のうちに包みこまれている使用価値と価値との内的な対立は、一つの外的な対立によって、すなわち二つの商品の関係によって表わされるのであるが、この関係のなかでは、自分の価値が表現されるべき一方の商品は直接にはただ使用価値として認められるのであり、これにたいして、それで価値が表現される他方の商品は直接にはただ交換価値として認められるのである。つまり、一商品の単純な価値形態は、その商品に含まれている使用価値と価値との対立の単純な現象形態なのである。(75~76ページ)

ところで、最初の引用文の次のパラグラフでは、マルクスは次のように述べている。

この章のはじめに、普通の言い方で、商品は使用価値であるとともに交換価値である、と言ったが、これは厳密に言えばまちがいだった。商品は、使用価値または使用対象であるとともに「価値」なのである。商品は、その価値が商品の現物形態とは違った独特な現象形態、すなわち交換価値という現象形態をもつとき、そのあるがままのこのような二重物として現われるのであって、商品は、孤立的に考察されたのでは、この交換価値という形態をけっしてもたないのであり、つねにただ第二の異種の一商品にたいする価値関係または交換関係のなかでのみこの形態をもつのである。とはいえ、このことを知っておきさえすれば、さきの言い方も有害なものではなく、かえって、簡単にすることに役立つのである。(75ページ)

この文章は、これまでたどってきた脈絡から考えると、不可解な文章である。「普通の言い方」とは、当時の経済学における言い方を指す。最初に、「この章のはじめに、普通の言い方で、商品は使用価値であるとともに交換価値である、と言ったが、これは厳密に言えばまちがいだった」と書かれている。日本語の文章あるいは日本語訳の文章によくあることだが、「と言った」の主語がない。このような文章の場合、読者は当然のこととして、私は、この章のはじめに、……と言ったが、これ(私が言ったこと)はまちがいだった、というふうに理解する。

そこで、第一章のはじめの部分を探しても、このような表現に相当する文章は見あたらない。第二節の冒頭に、次のような文章がある。「最初から商品はわれわれに対して二面的なものとして、使用価値および交換価値として、現われた」。この「最初から」というのは、この章のはじめの第一節から、という意味である。また、「商品はわれわれに対して……使用価値および交換価値として、現われた」のであって、私(またはわれわれ)は、普通の言い方で、商品は使用価値であるとともに交換価値である、と言ったのではない。

つまり、マルクスが本章のはじめに示した分析・検討の筋道は、以下のようであった。「……それゆえ、われわれの研究は商品の分析から始まる」(第一節の冒頭)。では、まずはじめに、商品とは

いかなるものと言われているか？ 経済学の普通の言い方では、商品は使用価値であるとともに交換価値である、と言われている。それでは、商品の使用価値とは何を指し、経済学における交換価値とはいかなることを指しているのか、をとことん問いただしてみよう。

このような筋道に沿って分析し考察してきたのちに、ここに至って彼自身が上掲の引用文のような文章を書くのは、やはり不可解で奇妙である。他の3種類の日本語訳書で当該力所を調べたが、いずれも岡崎訳とほぼ同じであった。それで、エンゲルスの英訳書の当該力所を見ると、次のように訳されている。

When, at the beginning of this chapter, we said, in common parlance, that a commodity is both a use-value and an exchange-value, we were, accurately speaking, wrong. (下線は丹野)

ここにははっきりと主語 we が記されており、われわれは……と言ったが、われわれはまちがっていた と、マルクスが書いているように読める。

念のために、ドイツ語原文にあたってみた。

Wenn es im Eingang dieses Kapitels in der gang und gäben Manier hieß: Die Ware ist Gebrauchswert und Tauschwert, so war dies, genau gesprochen, falsch.

原文では、es heißt, (daß) ……という構文(の過去形)が用いられており、これは「……と言われている」とか「……だそうである」といった意味あい用いられる文章である。

ドイツ語原文を私があえて訳せば、「この章のはじめのところでは、ごく普通の(ありふれた)言い方によれば、商品は使用価値であるとともに交換価値である、ということになっていたけれども、それは厳密に言えばまちがだったのである」となる。いずれにせよ、エンゲルスや、彼の英訳に引きずられてしまったのかどうか知らないが、何人もの日本語訳者たちが、「商品は……である」とマルクス自身がはじめのところで言った、しかもあとになって厳密に考えてみると、自分が言ったことはまちが이었다、と彼自身ここで述べていると誤解したから、上掲のような英訳や和訳をしたのである。だから、これらの読者がその文章どおりに読んで、文章どおりに理解する。そうすると、マルクスがああページで語っていたこととこのページで述べていることが、くい違っていたり矛盾していたりする、といったことが生じるのである。それぞれの読者や研究者が、こうした混乱を基にしながら第一章について論じ合うとなれば、議論が紛糾するのは当然である。

ついながながと注釈してしまったが、先の引用文のところマルクスが言おうとしている(と私に思われる)ことを、私の補足や蛇足をそのまま挿入しながら、たどってみる。

この章のはじめに、ごく普通には、商品は使用価値であるとともに交換価値であると言われて



いる、と紹介したが、これは、これまでの分析で明らかになったように、厳密に言えばまちが이었다。経済学の考えをより正確に表現するなら、商品は使用価値または使用対象であるとともに、「価値」である、と言うべきなのである。だがしかし、これまでの検討でわれわれが明確化したように、商品は孤立的に考察されたのでは、彼らの言う「価値」の目に見える形としての交換価値という形態をけっしてもたないのであり、商品は、その価値が自分の現物形態とは違った独特な現象形態、すなわち交換価値という現象形態をもつとき、そのあるがままの二重物として現われるのだ。商品は、つねにただ第二の異種の一商品にたいする価値関係または交換関係のなかでのみこの形態をもつのである。とはいえ、このこと（これまでわれわれが分析してきたこと）を知っておきさえすれば、さきの言い方（経済学者たちの言い方：もちろん彼らはこういう事情に無頓着にさきの言い方をしているのだが）も有害なものではなく、かえって簡単にすることに役立つのである。（どこでどう役立つのかって？ 本節（第三節）のこれからさきの考察検討にあたって、このことさえおぼえておいてくれれば、いちいちこのことを繰り返し確認しながら論を進める苦勞を省くことができるからですよ）。

マルクスは、上掲の引用文の次のパラグラフで、次のように言う。

われわれの分析が証明したように、商品の価値形態または価値表現は商品価値の本性から出てくるのであって、逆に価値や価値量がそれらの交換価値としての表現様式から出てくるのではない。ところが、この逆の考え方は、重商主義者たち……の妄想であるとともに、彼らとは正反対の近代の自由貿易外交店員……の妄想でもある。……（後略）（75ページ）

このパラグラフの最初の文章も、ここまでの「われわれの分析」つまりマルクスの分析を正確にたどれないと、すなわち経済学の論理と、それらを彼が徹底的に問いつめ批判して、顕微解剖により顕わにした分析結果とを混同してしまうと、理解できないかまたはまったく逆の意味に理解誤解してしまう。ましてや、上に見たように、このパラグラフの直前に この章のはじめに、（われわれは）……と言ったが、これ（……とわれわれが言ったこと）は厳密に言えばまちが이었다。商品は、使用価値または使用対象であるとともに「価値」なのである、とマルクス自身が述べているかのような文章があればなおさらである。

そうなると、この文章のなかの「商品価値の本性」も、投下労働価値説に立つ経済学者たちの言う商品価値の本性を指しているのだと、誤解することになる。その結果は、「われわれの分析が証明したように、商品の価値形態または価値表現は商品価値の本性から出てくるのであって、逆に価値や価値量がそれらの交換価値としての表現様式から出てくるのではない」という文章は、マルクスが言おうとしたこととはまったく逆の意味に誤解されてしまう。

彼の言う「商品価値の本性」とは、商品つまりその所有者が他人の所持する別の品物と交換しよ

うとしているその品物に担わせている超自然的な属性、この社会の人びとの間での彼らに特有のある社会的な関係をあたかも物と物との間の関係であるかのように無意識に置き換えて担わせている超自然的 社会的 な属性なのだ、ということであった。だから、商品となるさまざまな品物を、それぞれ単独に取りあげていくら調べても、その商品の「価値」も「その大きさ」もけっして姿を現わさない。それは、だから別の品物との関係つまり交換という関係において、交換という場面の中でしか現象しえないのである。しかもそこでの奇妙さ、不可解さはすでに見たとおりである。経済学者たちはその逆に、ある商品の価値や価値量がそれらの交換価値としての表現様式から出てくる、把握できるのだと考えている。こちらの方が投下労働価値説に立つ経済学の考え方である。けれど、そうではありませんよ、逆なんですよ、というわけである。だからマルクスは、次のように言う。

商品Bにたいする価値関係に含まれている商品Aの価値表現のいっそう詳しい考察は、この価値関係のなかでは商品Aの現物形態はただ使用価値の姿として、商品Bの現物形態はただ価値形態または価値の姿としてのみ認められているということを示した。つまり、商品のうちに包みこまれている使用価値と価値との内的な対立は、一つの外的な対立によって、すなわち二つの商品の関係によって表わされるのであるが、この関係のなかでは、自分の価値が表現されるべき一方の商品は直接にはただ使用価値として認められるのであり、これにたいして、それで価値が表現される他方の商品は直接にはただ交換価値として認められるのである。つまり、一商品の単純な価値形態は、その商品に含まれている使用価値と価値との対立の単純な現象形態なのである。

労働生産物は、どんな社会状態のなかでも使用対象であるが、しかし労働生産物を商品にするのは、ただ、一つの歴史的に規定された発展段階、すなわち使用物の生産に支出された労働をその物の「对象的」な属性として、すなわちその物の価値として表わすような発展段階だけである。それゆえ、商品の単純な価値形態は同時に労働生産物の単純な商品形態だということであり、したがってまた商品形態の発展は価値形態の発展に一致するということになるのである。

(75～76ページ：傍点はマルクス)

このなかの第2パラグラフの、「労働生産物は、どんな社会状態のなかでも使用対象であるが」とは、古今東西のどんな社会でも、私が調査してきたアフリカ熱帯森林に生きる狩猟採集民ピグミーの社会でも、彼らの労働の産物は彼ら自身の使用対象となるということである。「が、しかし労働生産物を商品にするのは、ただ、一つの歴史的に規定された発展段階、すなわち使用物の生産に支出された労働をその物の『对象的』な属性として、すなわち価値として表わすような発展段階だけである」。もちろん、ピグミーは自分たちの労働の産物を交換することはない。かといって、自分または自分の家族メンバーの労働の産物は自分たちだけで使用し消費するのかといえば、もちろんそうではない。互いにそれぞれの生産物を分かち合う・共にする・shareするのである。だから、

彼らはそれらの品物の生産・獲得・加工にあたって彼らが費やした労働を、それらの品物の「対象的」な属性、すなわち価値として表わす。つまりは自分の品物を相手の別の品物と交換する、互いの品物を交換する。といったことをしなない。そんなことを何の疑いもなく当然のこととして行なう（商品にする）のは、「ただ、一つの歴史的に規定された発展段階、すなわち使用物の生産に支出された労働をその物の『対象的』な属性として」、要するにその物の超自然的・社会的属性として表わすような発展段階に至った社会だけだ、というのである。ただし、マルクス自身がさきに言及していたように、このような発展段階の萌芽状態は、すでに古代ギリシアのポリスにも出現していた。しかもそこでは、金貨という貨幣すら使用されていた。「それゆえ、商品の単純な価値形態（これまでの第三節のA「単純な……価値形態」）は同時に労働生産物の単純な商品形態だということになり、したがってまた商品形態の発展は価値形態の発展に一致するということになるのである」。そこで次にその発展の過程をたどってみようと彼は言う。

単純な価値形態、すなわち一連の諸変態を経てはじめて価格形態にまで成熟するこの萌芽形態の不十分さは、一見して明らかである。

ある一つの商品Bでの表現は、商品Aの価値をただ商品A自身の使用価値から区別するだけであり、したがってまた、商品Aをそれ自身とは違ったなんらかの一つの商品種類にたいする交換関係のなかにおくだけであって、ほかのすべての商品との商品Aの質的な同等性と量的な割合とを表わすものではない。一商品の単純な相対的価値形態には、他の一商品の個別的な等価形態が対応する。こうして、上着は、リンネルの相対的価値表現のなかでは、ただこの一つの商品種類リンネルにたいして等価形態または直接的交換可能性の形態をもつだけである。

とはいえ、個別的な価値形態はおのずからもっと完全な形態に移行する。個別的な価値形態によっては、一商品Aの価値はただ一つの別種の商品で表現されるだけである。しかし、この第二の商品がどんな種類のものであるか、上着や鉄や小麦などのどれであるかは、まったくどうでもよいのである。つまり、商品Aが他のどんな商品種類にたいして価値関係にはいるかにしたがって、同じ一つの商品のいろいろな単純な価値表現が生ずるのである\*。商品Aの可能な価値表現の数は、ただ商品Aとは違った商品種類の数によって制限されているだけである。それゆえ、商品Aの個別的な価値表現は、商品Aのいろいろな単純な価値表現のいくらかでも引き伸ばせる列に転化するのである。（76ページ）

このなかの\*印の文章には、「第二版への注」として、「たとえばホメロスにあっては、一つの物の価値が多数の違った物で表現される」と付記している。ホメロスは紀元前8世紀の人である。彼の叙事詩『イリアス』か『オデュッセイア』のどこかに、ある品物がさまざまな種類の品物と交換される場面が描かれているのであろう。つまりマルクスは、これまでのサブセクションAで考察してきた「個別的な価値形態はおのずからもっと完全な形態（次のBや、C、D：丹野）に移行する」

と述べているが、これらの「移行」は論理的思考としてのみでなく、歴史上の移行でもあったと考えているのである。

B 全体的な、または展開された価値形態

$z$  量の商品 A =  $u$  量の商品 B または =  $v$  量の商品 C または =  $w$  量の商品 D

または =  $x$  量の商品 E または = etc.

このサブセクション B およびそれにつづく C、D は、マルクスが 62 ページで予告していた「...この貨幣形態の生成を示すことであり、したがって、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な最も目だたない姿（サブセクション A：丹野）から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡すること」にあてられている。しかも、これらのサブセクションは、彼自身の論理的または理論的思考を理詰めにも展開すればこうなると叙述しているのではない。時間的・空間的に存在したいくつもの社会のなかの、ある時点のある社会で、人びとがある品物と別の品物との単純な・個別的な・偶然的な交換を行なうようになった。その交換が時代とともにどんどん展開していくにつれて、この社会の人びとの行動と思考がどのように変化しつつ形成されていったか、を追跡しているのである。

人びとの生産物は、「交換以前には商品ではなく、交換によってはじめて商品になる」（102 ページ）。この交換が日常生活にすっかり定着してしまった社会の人びとは、商品とは使用価値であるとともに交換価値または価値でもあるという信念を抱くに至った。では、その交換価値あるいは価値とはいかなるものであるか、というマルクスの顕微解剖的分析は、サブセクション A までですべて完了している。彼は A の冒頭（63 ページ）で「すべての価値形態の秘密は、この単純な価値形態のうちにひそんでいる」と述べていた（傍点は丹野）。その秘密はすでに解明されている。あとは、彼らにとっての（彼らの信じる）商品の価値が、どのような表現形態を経て貨幣形態に至るかを追跡するだけである。すでに解明された秘密は、どの価値形態においても共通の秘密なのであって、さらに新たな秘密が付け加わるわけではない。だから、この B 以降の文章に出てくる「価値」という言葉は、この社会の人びとにとっての価値ということであり、彼らの商品の価値は彼らの社会の歴史のなかでどのような表現形態の展開をたどったかを解説しているだけである。マルクスは B 以下で彼独自の理論を展開しているわけではない。

以上のような観点から読むかぎり、サブセクション B、C、D へのこれ以上の細かな補足はまったく不必要である。ただし、サブセクション B の最後の 2 行の文章について蛇足を加える。

20 エレのリンネル = 1 着の上着 または = 10 ポンドの茶 または = etc. という列を逆にすれば、すなわち事実上すでにこの列に含まれている逆関係を言い表わしてみれば、次のような形態が与えられる。（79 ページ）

彼はこのように述べて、次の「C 一般的価値形態」の解説に移行する。これは、サブセクションBにおけるある一つの商品の価値がさまざまな商品でもつて展開された価値形態を、マルクスが頭の中できると逆転させるとCの形態が得られると考えたのだ、と誤解されているようである。しかしそうではない。彼はそのまえの文章できちんと説明している。

とはいえ、展開された相対的価値形態は、単純な相対的価値表現すなわち第一の形態の諸等式の総計から成っているにすぎない。たとえば、

20エレのリンネル = 1着の上着

20エレのリンネル = 10ポンドの茶

などの総計からである。

しかし、これらの等式は、それぞれ、逆にすればまた次のような同じ意味の等式をも含んでいる。すなわち

1着の上着 = 20エレのリンネル

10ポンドの茶 = 20エレのリンネル

などを含んでいる。

ここまでは、マルクスが彼の頭の中で逆転させたかのようである。しかし、これに続けて彼は、次のように述べている。

じっさい、ある人が彼のリンネルを他の多くの商品と交換し、したがってまたリンネルの価値を一連の他の商品で表現するならば、必然的に他の多くの商品所持者もまた彼らの商品をリンネルと交換しなければならず、したがってまた彼らのいろいろな商品の価値を同じ第三の商品で、すなわちリンネルで表現しなければならない。そこで、20エレのリンネル = 1着の上着 または = 10ポンドの茶 または = etc. という列を逆にすれば、すなわち事実上すでにこの列に含まれている逆関係を言い表わしてみれば、次のような形態が与えられる。(同上：傍点は丹野)

ここでの「20エレのリンネル = ……」や、「…… = 20エレのリンネル」に引きずられて、マルクスの思考のなかでの仮定の展開だと思うのであれば、一例としてサハラ砂漠を越えて南下してきた隊商がラクダの背に乗せて運んできた塩を、リンネルの代わりに考えればよいであろう。

また、彼は63ページの最後のところで、すでに次のように注意していた。

もちろん、20エレのリンネル = 1着の上着 または、20エレのリンネルは1着の上着に値するという表現は、1着の上着 = 20エレのリンネル または1着の上着は20エレのリンネルに値する

という逆関係を含んでいる。しかし、そうではあっても、上着の価値を相対的に表現するためには、この等式を逆にしなければならない。そして、そうするやいなや、上着に代わってリンネルが等価物になる。だから、同じ商品が同じ価値表現で同時に両方の形態で現われることはできないのである。この両形態はむしろ対極的に排除しあうのである。

マルクスの方がむしろ、等式を逆にするのは頭の中で単純にできることではないことを、読者に注意しているのである。

これまでたどってきたマルクスのディアレクティークを通しての彼自身の思考の展開を把握していれば、次の「C 一般的価値形態」でも「D 貨幣形態」でも、彼は読者が理解に苦しむようなことはなにも述べていない。歴史的な事実経過を、といっても生産物を商品として交換しあう人びとの社会が経てきた歴史的経過を、彼は叙述しているのである。彼がすでに顕微解剖して見せた、この社会の人びとにとっての商品の価値なるものは、まぼろしのような対象性であり、ある品物を単独に調べてもけっしてその価値なるものが姿を現わすことはないこと、それは別のある商品との交換関係のなかでしか表現できないものであること、しかもそこには超自然的なことが自然的なこととされるといふ不可解なことが含まれていること、これらのことはすべての価値形態に通底している。だから、貨幣形態に至ってこうした矛盾が解決されるわけでも、雲散霧消するわけでもない。それゆえ彼は、「D 貨幣形態」の最後に、次のように述べている。

貨幣形態の概念における困難は、一般的等価形態の、したがって、一般的価値形態の、形態（つまりC）の、理解に限られる。形態は、逆关系的に形態（つまりB）に、展開された価値形態に、解消し、そして、形態の構成要素は、形態（つまりA）、すなわち 20エレのリンネル = 1着の上着 または  $x$ 量の商品A =  $y$ 量の商品Bである。それゆえ、単純な商品形態は貨幣形態の萌芽なのである。（85ページ：カッコ内は丹野）

#### 第四節 商品の呪物的性格とその秘密

この第四節は、「第一章 商品」の最後の節である。ここでマルクスは、これまでに分析し解剖して明らかにした商品の呪物的性格とその秘密について、再び詳述する。商品は、個別具体的なさまざまな物である。といっても、自然のままに存在する物ではない。人間が自然の状態で存在するなんらかの物に働きかけ、頭脳と身体を使って、それだけでなくピグミーの弓矢や掘り棒のようなごく単純な道具であれ、複雑きわまりない機械であれさまざまな生産手段をも用いて、採集し狩猟したり、加工・変形したりして生産した物である。しかし、それらの物すべてが商品に自動的になるのではない。交換の対象となればこそそれらは商品になるのである。こうした人間の労働の産物は、交換なしにshareする狩猟採集民ピグミーの社会であれ、交換・売買を常とする社会であれ、

どの社会のどの人びとにとっても具体的な有用労働によって生産された具体的な有用物、つまり個別具体的な使用価値である。

ところが、それらが交換の対象になると、つまり商品になると、同じ物であるにもかかわらず摩訶不思議な物に変身する。マルクスによる「商品の呪物的性格とその秘密」の解明をわれわれは見てきた。彼はここで改めてその要点を詳述する。

商品は、一見、自明な平凡なものに見える。商品の分析は、商品とは非常にへんてこなもので形而上学的な小理屈や神学的な小言でいっぱいなものだということを示す。商品が使用価値であるかぎりでは、その諸属性によって人間の諸欲望を満足させるものだという観点から見ても、あるいはまた人間労働の生産物としてはじめてこれらの属性を得るものだという観点から見ても、商品には少しも神秘的なところはない。人間が自分の活動によって自然素材の形態を人間にとって有用な仕方に変化させるということは、わかりきったことである。たとえば、材木で机をつくれれば、材木の形は変えられる。それにもかかわらず、机はやはり材木であり、ありふれた感覚的なものである。ところが、机が商品として現われるやいなや、それは一つの感覚的であると同時に超感覚的であるものになってしまうのである。……（中略）……

だから、商品の神秘的な性格は商品の使用価値からは出てこないのである。それはまた価値規定の内容からも出てこない。なぜならば、第一に、いろいろな有用労働または生産活動がどんなに違っていようとも、それらが人間有機体の諸機能だということ、また、このような機能は、その内容や形態がどうであろうと、どれも本質的には人間の脳や神経や筋肉や感覚器官などの支出だということは、生理学上の真理だからである。第二に、価値量の規定の根底にあるもの、すなわち前述の支出の継続時間、または労働の量について言えば、この量は感覚的にも労働の質とは区別されうるものである。どんな状態のもとでも、生活手段の生産に費やされる労働時間は、人間の関心事でなければならなかった。といっても、発展段階の相違によって一様ではないが。最後に、人間がなにかの仕方ですら相互のために労働するようになれば、彼らの労働もまた社会的な形態をもつことになるのである。（85～86ページ）

以上の引用文のうちの、第2パラグラフの内容を確認しておこう。「だから、商品の神秘的な性格は商品の使用価値からは出てこない」ことはすでに見たとおりである。「それはまた価値規定の内容からも出てこない」と彼は言い、その理由を三つあげて説明している。そこでまず「価値規定の内容」とはどんな内容であったかを復習しておこう。この社会の人びとにとっては、商品は使用価値であるとともに交換価値ひいては価値でもあるのだった。しかも、その品物・商品を生産するにあたって、人間の労働が注ぎ込まれ支出されること、その労働の量は時間によって計測されること、よって、商品の価値とその大きさは、その生産に支出された労働とその量のことである、ということであった。

マルクスはこれを受けて、「それ（商品の神秘的な性格）はまた（このような）価値規定の内容からも出てこない」と明言し、「なぜならば、第一に、……。第二に、……。最後に、……」、とその理由を説明する。ここでの第一、第二、第三（「最後」）の説明において、彼は彼らの言う価値規定にそって商品となるその品物の生産の場面での労働を取りあげて、その労働のもつ諸性格を列記し、だから、こういうところから商品の神秘的性格は出てくるわけがないのだ、と言うのである。このように何の不思議も生じるはずのない過程を経て生産されたもろもろの品物が、いざ商品として交換の対象になると、「それは一つの感覚的であると同時に超感覚的（超自然的：丹野）であるものになってしまう」。その謎はどこから生ずるのか、が次のパラグラフの課題である。

さらにもう一つ、上掲の引用文のなかの最後の文章について補足を加える。というのは、この文章と次のパラグラフとの間には、読者はもう了解しているだろうという判断のもとでの、マルクスの省略があるからである。「最後に、人間がなにかの仕方ですら相互のために労働するようになれば、彼らの労働もまた社会的な形態をもつことになるのである」とは、次のパラグラフの最初の「それでは、労働生産物が商品形態をとるとき」という状態を指しているのではない。ここでの「最後に」というのは、歴史的な変遷の最後にという意味ではない。この文章のまえの、商品の神秘的な性格は商品の使用価値からも、価値規定の内容からも出てこない理由として、「なぜならば、第一に、……。第二に、……。最後に、……。」というふうに説明していることだからである。

その最後の理由として彼があげる、「人間がなにかの仕方ですら相互のために労働するようになれば、彼らの労働もまた社会的な形態をもつことになる」という日本語訳は、誤解を招きやすい微妙な訳である。ドイツ語原文のニュアンスは、人間が……ようになれば、彼らの労働も……をもつことになる ではない。この訳だと、人間は歴史上のある時点でなんらかの仕方ですら相互のために労働するようになった（それ以前はこういうことはしていなかった）そのときから、彼らの労働も社会的な形態をもつことになった（変化した）と読者は読みかねない。そうではなく、むしろ以下のようなことを彼は言おうとしているのである。

人間がなんらかのやり方でお互いのために労働するやいなや、彼らの労働もまたある（一つの）社会的な形態をもつのである。

これでも上掲の訳と似たようなものではないか、と思われるかもしれないが、マルクス自身の考えは、人間は本来、あるいは人間以前の存在から人間となったそのときから、なんらかの仕方でもって相互のために労働していたのであり、彼らの労働もまた（私的で個別的な形態ではない）ある社会的な形態をとったのだ、ということである。ただし、人間が相互のために労働するそのやり方は一様だったのではなく、歴史上、一緒に生活する人の数が増えたりその他さまざまな事情によって変化してきた。それに伴って彼らの労働もつ社会的な形態の方も、時代と地域によっていろいろな社会的形態をとり、変化してきて、現在のような形態に至っている、ということを含意している。

そして、われわれが本書で考察の対象としている社会は、商品生産と交換経済にすっかり覆われ



ている社会である。この社会の人びとは、相互のためというよりもむしろ私的に労働を行なっている。しかし、私的に労働し私的に有用物を生産していても、それぞれが自分自身の生産物を消費して私的に生き、互いに無関係に生活しているのではない。彼らは互いの生産物を“交換によって”やりとりし、それらによって生活する。その意味では、彼らの私的な労働は直接に相互のための仕方での労働ではないのだが、間接的に結果として相互のための労働となっていることは確かである。そうでなければ、彼らの労働は社会的にはまったくムダで無用の労働となり、彼ら自身の暮らしもなりたたない。だから彼らの労働もまたある種の社会的形態をもっている。それは、別のやり方で相互のために労働をする別の社会の人びとの労働がもつ社会的形態とは、とうぜん違ったものになっている。その社会ではどんな状況になっているか。その要約が次のパラグラフ以降で示される。

それでは、労働生産物が商品形態をとるとき、その謎のような性格はどこから生ずるのか？ 明らかにこの形態そのものからである。いろいろな人間労働の同等性はいろいろな労働生産物の同等な価値対象性という物的形態を受け取り、その継続時間による人間労働力の支出の尺度は労働生産物の価値量という形態を受け取り、最後に、生産者たちの労働の前述の社会的規定がそのなかで実証されるところの彼らの諸関係は、いろいろな労働生産物の社会的関係という形態を受け取るのである。(86ページ)

繰り返しになるが、「いろいろな人間労働の同等性」、つまりいろいろな人びとが行なうさまざまな労働は同等なのである、という考えは、マルクス自身の考えではない。この社会の人びとはそう考えている、ということである。だから、彼らが生産したいろいろな労働生産物は、それぞれに違う品物だとはいえ等しく価値でもあるのだ、という謎めいた物となる。また、「生産者たちの労働の前述の社会的規定」とは、人間はどんなやり方であれなんらかの仕方でもって相互のために労働するのであって、彼らの労働もまたある社会形態をもつのだ、ということを指す。それゆえ、この社会においても人びとの労働はある種の社会的形態をとり、人びと相互の諸関係はそのなかで実証される。ところがこの社会の人びとの労働は上述のように直接に相互のためという形をとらず、労働の産物の“交換”をとおしての間接的な、結果としての相互のための労働となっている。だから彼らの社会関係は間接的な関係となり、彼らのいろいろな労働生産物どうしが関係をとる結び交換関係に入る という、人ではなくあたかも物どうしの社会的関係であるかのような形態になるのである。

だから、商品形態の秘密はただ単に次のことのうちにあるわけである。すなわち、商品形態は人間にたいして人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対物的性格として反映させ、これらの物の社会的な自然属性として反映させ、したがってまた、総労働にたいする生産者

たちの社会的関係をも諸対象の彼らの外に存在する社会的関係として反映させるということである。このような置き換え〔Quidproquo〕によって、労働生産物は商品になり、感覚的であると同時に超感覚的である物、または社会的な物になるのである。同様に物が視神経に与える光の印象は、視神経そのものの主観的な刺激としてではなく、目の外にある物の対象的な形態として現われる。しかし、視覚の場合には、現実には光が一つの物から、すなわち外的な対象から、別の一つの物に、すなわち目に、投ぜられるのである。それは、物理的な物と物とのあいだの一つの物理的な関係である。これに反して、商品形態やこの形態が現われるところの諸労働生産物の価値関係は、労働生産物の物理的な性質やそこから生ずる物的な関係とは絶対になんの関係もないのである。ここで人間にとって諸物の関係という幻影的な形態をとるものは、ただ人間自身の特定の社会的関係でしかないのである。それゆえ、その類例を見いだすためには、われわれは宗教的世界の夢幻境に逃げこまなければならない。ここでは、人間の頭の産物が、それ自身の生命を与えられてそれら自身のあいだでも人間とのあいだでも関係を結ぶ独立した姿に見える。同様に、商品世界では人間の手の生産物がそう見える。これを私は呪物崇拜と呼ぶのであるが、それは、労働生産物が商品として生産されるやいなやこれに付着するものであり、したがって商品生産と不可分なものである。

このような、商品世界の呪物的性格は、前の分析がすでに示したように、商品を生産する労働の特有な社会的性格から生ずるものである。(86~87ページ)

この部分に補足はもう不必要である。彼は次に、「商品を生産する労働の特有な社会的性格」について再度説明する。

およそ使用対象が商品になるのは、それらが互いに独立に営まれる私的諸労働の生産物であるからにはほかならない。これらの私的諸労働の複合体は社会的総労働をなしている。生産者たちは自分たちの労働生産物の交換をつうじてはじめて社会的に接触するようになるのだから、彼らの私的諸労働の独自の社会的性格もまたこの交換においてはじめて現われるのである。言い換えれば、私的諸労働は、交換によって労働生産物がおかれ労働生産物を介して生産者たちがおかれるところの諸関係によって、はじめて実際に社会的総労働の諸環として実証されるのである。それだから、生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的関係は、そのあるがままのものとして現われるのである。すなわち、諸個人が自分たちの労働そのものにおいて結ぶ直接に社会的な関係としてではなく、むしろ諸個人の物的な諸関係および諸物の社会的な諸関係として、現われるのである。(87ページ)

「これらの私的諸労働力の複合体は社会的総労働をなしている」というのは、互いに独立にかつてに営まれる私的諸労働ではあっても、にもかかわらずそれらをトータルした複合体は社会的総労働

働をなしている、なぜなら交換を介してとはいえ全体の労働の産物に依存して全員が生活しているのだから、ということである。別の社会では、人びとは私的にではなく直接にお互いのために労働し、その諸産物を交換することもなしに、働けない人たちも含めてみんながそれらによって生活する。この別の社会にあってもみんなの諸労働の複合体が社会的総労働をなしていることは、もちろんである。ただし、「われわれが考察」している社会の人びとの労働は、上掲の引用文のようにこの社会に「特有な社会的性格」をもってしまふ。

労働生産物は、それらの交換のなかではじめてそれらの感覚的に違った使用対象性から分離された社会的に同等な価値対象性を受け取るのである。このような、有用物と価値物とへの労働生産物の分裂は、交換がすでに十分な広がりと重要さをもつようになり、したがって有用な諸物が交換のために生産され、したがって諸物の価値性格がすでにそれらの生産そのものにさいして考慮されるようになったときに、はじめて実際に実証されるのである。この瞬間から、生産者たちの私的労働は実際に一つの二重な社会的性格を受け取る。それは、一面では、一定の有用労働として一定の社会的欲望を満たさなければならず、そのようにして自分を総労働の諸環として、社会的分業の自然発生的体制の諸環として、実証しなければならない。他面では、私的諸労働がそれら自身の生産者たちのさまざまな欲望を満足させるのは、ただ、特殊な有用な私的労働のそれぞれが別の種類の有用な私的労働のそれぞれと交換可能であり、したがってこれと同等と認められるかぎりでのことである。互いにまったく違っている諸労働の同等性は、ただ、諸労働の現実の不等性の捨象にしかありえない。すなわち、諸労働が人間の労働力の支出、抽象的人間労働としてもっている共通な性格への還元にはありえない。私的生産者たちの頭脳は、彼らの私的諸労働のこの二重の社会的性格を、実際の交易、生産物交換で現われる諸形態でのみ反映させ、したがって彼らの私的諸労働の社会的に有用な性格を、労働生産物が有用でなければならないという、しかも他人のために有用でなければならないという形態で反映させ、異種の諸労働の同等性という社会的性格を、これらの物質的に違った諸物の、諸労働生産物の、共通な価値性格という形態で反映させるのである。(87~88ページ)

これまでの脈絡を踏まえていれば、ここに補足は不要であろう。次のパラグラフは、多数の論者が著書や論文の中でさまざまな論旨や観点からある部分や他の部分を引用している、という意味で有名な(?)文章である。

だから、人間が彼らの労働生産物を互いに価値として関係させるのは、これらの物が彼らにとっては一様な人間労働の単に物的な外皮として認められるからではない。逆である。彼らは、彼らの異種の諸生産物を互いに交換において価値として等置することによって、彼らのいろいろに違った労働を互いに人間労働として等置するのである。彼らはそれを知ってはいないが、しか

し、それを行なうのである。それゆえ、価値の額に価値とはなんであるかが書いてあるのではない。価値は、むしろ、それぞれの労働生産物を一つの社会的な象形文字にするのである。あとになって、人間は象形文字の意味を解いて彼ら自身の社会的な産物の秘密を探りだそうとする。なぜならば、使用対象の価値としての規定は、言語と同じように、人間の社会的な産物だからである。労働生産物は、それが価値であるかぎりでは、その生産に支出された人間労働の単に物的な表現でしかないという後世の科学的発見は、人類の発展史上に一時代を画するものではあるが、しかしそれは決して労働の社会的性格の対外的外観を追い払うものではない。この特殊な生産形態、商品生産だけにあてはまること、すなわち、互いに独立な私的諸労働の独自の社会的性格はそれらの労働の人間労働としての同等性にあるのであってこの社会的性格が労働生産物の価値性格の形態をとるのだということが、商品生産の諸関係のなかにとらわれている人びとにとっては、かの発見の前にもあとにも、最終的なものに見えるのであって、それは、ちょうど、科学によって空気がその諸要素に分解されてもなお空気形態は一つの物理的な物体形態として存続しているようなものである。(88ページ)

まず、この最初の部分をゆっくり読んでみよう。ここまでの脈絡を正確にたどれない状態で、さらにややこしい言い回しの文章に突きあたると、読解がいつそう混乱しかねないからである。

「だから、……からではない。逆である。……のである。」のはじめの文章をA、次の文章をBとしよう。通常の叙述スタイルでは、前のパラグラフで述べたことを踏まえて、「だから(したがって)……」と次のことがらを導いてくる際には、「だから、Bなのである。逆にAなのではありませんよ」と書く。しかも、Aという考え方をとる人たちがいない場合には、「逆にAなのではありませんよ」とわざわざ述べることも不必要である。ということは、マルクスにとってはわざわざ述べる、しかもそれをさらに順序を逆にしてまで強調する必要があったのである。つまり多くの人はAだというふうに考えているようだが、そうではないんだよ、逆なんだよ、と。

「人間が彼らの労働生産物を互いに価値として関係させる」ということの意味は、この社会の人びとは自分たちの労働の産物を互いに交換する、しかもそれぞれが自分の所持する品物は単にリンネル・上着・等々ではなく価値であり、ある大きさの価値なのだ、といてそれらに関係させる、ということである。なぜ彼らはそんなことをするのか？ なぜなら、「これらの物が彼らにとっては一様な人間労働の単に物的な外皮として認められる(とみなされる)」からだ、と人びとは考える。しかしそうではない。「逆である」。本当はこれまでの分析から明らかなように、「彼らは、彼らの異種の諸生産物を互いに交換において価値として等置することによって、彼らのいろいろに違った労働を互いに(一様な、つまり抽象的な：丹野)人間労働として等置するのである」。

それでは、このようなことを現実に日常的に行なっているのはこの社会の人びとなのだから、この人びとはこうしたことをわかったうえでやっているのか？ 「彼らはそれを知ってはいないが、しかし、それを行なうのである」。ただし繰り返すが、有史以来のすべての人間が行なってきたので

はない。この社会またはこの系統の社会は西洋世界に限られたわけではないが、さきに見たように古代ギリシアではアリストテレスや、さらに古くホメロスの時代から2千年以上にもわたって、「彼らはそれを知ってはいないが、しかし、それを行な」ってきたのである。

「それゆえ、価値の額に価値とはなんであるかが書いてあるのではない。価値（つまり労働の産物は価値なのだ）と彼らが考えること（丹野）は、むしろ、それぞれの労働生産物を一つの象形文字にするのである。あとになって、人間は象形文字の意味を解いて彼ら自身の社会的な産物の秘密を（すなわち、使用対象の価値としての規定（丹野）を探りだそうとする）。さきに見たように、アリストテレスは最初にこれを探求した人だった。そして近代の一連の経済学者や法学者、哲学者（ヘーゲル）たちがこれを解明しようとした。彼らの時代に至って、「人間の同等性（自由で独立で平等な人間（丹野））の概念がすでに民衆の先入見としての強固さをもつようにな」っていた（74ページ）。まさに「価値表現の秘密……は、……はじめてその謎を解かれることができる」（同上）その時代状況に至っていたのである。

「労働生産物は、それが価値であるかぎりでは、その生産に支出された人間労働の単に物的な表現でしかない」という後世の科学的発見は、人類の発展史上に一時代を画するものではあるが、しかしそれはけっして労働の社会的性格の对象的な外観を追い払うものではない。この文章も、スルメのようによくよく咬みこなしてみないと、マルクスの真意が味わえない。一見、彼は「後世の科学的発見」を称賛しているようでもあり、そうではないようでもある。「人類の発展史上に一時代を画する」その発見とは、「労働生産物は、それが価値であるかぎりでは、その生産に支出された人間労働の単に物的な表現でしかない」ということの見解である。だから、人びとは労働の産物を互いに価値として関係させ、交換するのだ、と発見者（たち）は言うであろう。この論理は、ついさきほど見た論理である。すなわち、このパラグラフの最初の行の、「人間が彼らの労働生産物を互いに価値として関係させるのは、これらの物が彼らにとっては一様な人間労働の単に物的な外皮として認められるから」と同じである。しかもこれは、マルクスがそう「ではない、逆なんだ」と否定した考え方である。とはいえ、その発見は「自由で独立で平等な人間」という近代に至って強固になった概念を背景にはじめて発見されたことであり、その意味では時代を画する発見だ、と彼はみなしたのである。しかもこれは、マルクスにとって過去のことではなく、当時の欧米の革命的状況下における同時代の発見なのであり、まさに時代を画しつつあるなかでのことである。

そうではあっても、違うものは違うのであって、それでは真に謎を解いたことにはならない。実は逆なのだ、と彼は次のように言う。「しかしそれ（発見）はけっして労働の社会的性格の对象的な外観を追い払うものではない」。この社会の人びとの労働は、直接の社会的関係で結ばれるのではなく、物と物が社会的関係を取り結ぶという外観をとって間接的に関係するだけだという状態を、この発見は解消するかといえば、逆にその状態を持続させるだけで、むしろそれを強化するだけではないか。というわけで、彼はさらに次のように語るのである。「この特殊な生産形態、商品生産だけにあてはまること、すなわち、互いに独立な私的諸労働の独自の社会的性格はそれらの労働の人

間労働としての同等性にあるのであってこの社会的性格が労働生産物の価値性格の形態をとるのだということが、商品生産の諸関係のなかにとらわれている人びとにとっては、かの発見の前にもあとにも、最終的な（つまり永遠不変の：丹野）ものに見えるのである。

また、上掲の引用文の途中には、「……あとになって、人間は象形文字の意味を解いて彼ら自身の社会的な産物の秘密を探りだそうとする。なぜならば、使用対象の価値としての規定は、言語と同じように、人間の社会的な産物だからである」と書かれている。そのため、論者たちのなかには、「使用対象の価値としての規定」を、言語学におけるシニフィアンとシニフィエの関係のアナロジーとして論考している人もいる。確かに、言語は人間の社会的産物である 人間のみ、しかも人類に普遍的な 。しかし、他方の、使用対象の価値としての規定は、人間の社会的な産物であるとはいえ、古今東西のどの社会にも普遍的な社会的産物ではない。「われわれが考察の対象としている社会」における社会的な産物である。マルクスは双方ともに人間の社会的な産物であると述べてはいるが、このような違いを明確に意識している。この違いを無視して言語学とのアナロジーを導入すると、論者自身が、使用対象の価値としての規定はすべての社会に普遍的なものであるという勘違いに落ち入り、マルクスの論理や脈絡とは咬み合わない議論を展開することになる。

上掲の引用文に続くいくつかのパラグラフは、「……ということが、商品生産の諸関係のなかにとらわれている人びとにとっては、かの発見の前にもあとにも、最終的なものに見える」ということの具体的な説明である。「とらわれている人びと」は、この社会の人びと一般だけでなく、「科学的発見」をした経済学その他の分野の学者たちをも指している。そしてマルクスは、90ページの最後のところで、第一章全体にわたって見てきた「商品世界のいっさいの神秘、商品生産の基礎の上で労働生産物を霧のなかに包みこむいっさいの奇怪事は、われわれが他の生産形態に逃げこめば、たちまち消えてしまう」と述べ、いくつかの「他の生産形態」の例をあげる。

第一は、「経済学はロビンソン物語を愛好するから」ということで、孤島の孤独なロビンソンの生産形態であり、第二は、「暗いヨーロッパの中世」の例である。そして第三は次のような例である。

共同的なすなわち直接に社会化された労働を考察するためには、われわれは、すべての文化民族の歴史の発端で見られるような労働の自然発生的な形態にまでさかのぼる必要はない。もっと手近な例は、自分の必要のために穀物や家畜や糸やリンネルや衣類などを生産する農民家族の素朴な家長制的な勤労である。これらのいろいろな物は、家族にたいしてその家族労働のいろいろな生産物として相対するが、しかし、それら自身が互いに商品として相対しはしない。これらの生産物を生みだすいろいろな労働、農耕や牧畜や紡績や織布や裁縫などは、その現物形態のまま社会な諸機能だからである。男女の別や年齢の相違、また季節の移り変わりにつれて変わる労働の自然的諸条件は、家族のあいだでの労働の配分や個々の家族成員の労働時間を規制する。しかし、継続時間によって計られる個人的労働力の支出は、ここでははじめから労働そのものの社会的規定として現われる。というのは、個人的労働力がはじめからただ家族の共同的労働力の

諸器官として作用するだけだからである。(92ページ)

最後に、彼は次のような生産形態の例をあげる。それはいまだ存在しない、マルクスの想像上の社会である。

最後に、気分を変えるために、共同の生産手段で労働し自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する自由な人びとの結合体を考えてみよう。ここでは、ロビンソンの労働のすべての規定が再現するのであるが、ただし、個人的にではなく社会的に、である。ロビンソンのすべての生産物は、ただ彼ひとりの個人的生産物だったし、したがって直接に彼のための使用対象だった。この結合体の総生産物は、一つの社会的生産物である。この生産物の一部分は再び生産手段として役だつ。それは相変わらず社会的である。しかし、もう一つの部分は結合体成員によって生活手段として消費される。したがって、それは彼らのあいだに分配されなければならない。この分配の仕方は、社会的生産有機体そのものの特殊な種類と、これに対応する生産者たちの歴史的発展度とにつれて、変化するであろう。ただ商品生産と対比してみるために、ここでは、各生産者の手にはいる生活手段の分け前は各自の労働時間によって規定されているものと前提しよう。そうすれば、労働時間は二重の役割を演ずることになるであろう。労働時間の社会的に計画的な配分は、いろいろな欲望にたいするいろいろな労働機能の正しい割合を規制する。他面では、労働時間は、同時に、共同労働への生産者の個人的参加の尺度として役だち、したがってまた共同生産物中の個人的に消費されうる部分における生産者の個人的な分けまへの尺度として役だつ。人びとが彼らの労働や労働生産物にたいしてもつ社会的関係は、ここでは生産においても分配においてもやはり透明で単純である。(92～93ページ)

このごく短いパラグラフが、資本主義的生産様式と商品の世界の次に来たるべき社会として、マルクスが思い描いた社会のスケッチであることは疑いない。彼の没後に誕生し、近年崩壊した社会主義国家は、計画経済ということでは、これに似ていたかもしれないが、「自分で意識して一つの社会的労働として支出する自由な人びとの結合体」ではまったくなかった。

彼は、第一章の終わり近くで、これまでの重苦しい「気分を変えるために」ごくごく簡潔な未来のスケッチを挿入しただけであって、第一章での商品の分析は本書全体の検討課題の始まりにすぎない。ただし、すでに見たように、この第一章が肝心なのだとは彼自身が序文で述べていたのだが。

このスケッチに続く本章最後の数ページは、「商品生産の諸関係にとらわれている」経済学とそれがこの社会で果たしている役回りへの、宗教と対比させながらの批判にあてられている。

## おわりに

本稿の最初に述べたように、『資本論』の「第一章 商品」はマルクスと経済学者たちとのディアレクティブーク、つまり対話篇として書かれている、と私は思った。それで、この観点から本章を読み解いてみると、どのような結果が得られるかを、マルクスの叙述のプロセスどおりに追跡して試みた。

すでに同様なことを試みて示してくれている本があるのではないかと探してみたが、私には見あたらなかった。本書について特に第一章について書かれた本はそれこそ山のようにあるであろうが、私が読んだ何冊かの本のどれも、私の読み方とは違っていたし、私の読解とは違う読解結果を引き出していた。そこで、思い切って自分でやってみることにしたのである。

第一章のさまざまな部分を取りあげ、検討している本は多数あることは承知しているが、本稿ではそれらの著者の論述にはいっさい触れなかった。本稿のなかに、誰がどの部分についてどのように考え、どう読み解いているか、またある著者の見解を別の著者がどう批判しているか、といったことを本稿で取りあげると、それだけでなくさえ込み入ったディアレクティブークの解説に、さらにややこしい話があちらこちらに加わることになり、それこそ脈絡がたどれなくなるからである。

本書の第一章は、ドイツ語原文で50ページほどの、本書全体からみればごく短い文章である。地の文で書かれた対話篇の解説という目的のために、かなりの分量を順を追って引用せざるをえなかった。しかもそれをさらに細かく区切って再度引用しその間の脈絡をたどる必要があり、補足や蛇足がつい長くなってしまった。

## 文 献

- マルクス 1965 『資本論』(岡崎次郎訳)「マルクス・エンゲルス全集」第23巻 第1分冊 大月書店
- 丹野 正 1991 「『分かち合い』としての『分配』 アカ・ピグミー社会の基本的性格」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』35 - 57頁 平凡社
- 丹野 正 1993 「モース『贈与論』の意義」弘前大学人文学部『文経論叢』28巻3号 1 - 37頁
- 丹野 正 1996 「『資本論』第一章「商品」の一文化人類学者の読み方( )」弘前大学人文学部『文経論叢』31巻3号 1 - 38頁
- 丹野 正 2002 「分かち合い：贈与：交換 共同体：仲間：社会への序論」弘前大学哲学会編『哲学会誌』第37号 23 - 41頁